イテク技術であった。また、生け花、着物の着付け、習字、茶道という4つの日本の伝統も学ぶことができた。日本のなかで世界中の人々が少なくとも一度は訪れるべきだと思う場所は、広島原爆資料館であり、人は「これが進歩か？」と考え始めるであろう。

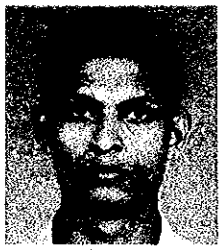
最後に、私は日本人から多くのことを学んだと言いたい。時間厳守、規律、礼儀正しさは、称賛すべきものである。来日前、私は日本を単に工業国としてとらえていたが、日本の豊かな文化・親切心を知るに至り、自分が間違っていたことに気づいた。私はこの旅を忘れることができないであろうし、日本から多くを学んだ私は、前と同じ人間ではあり得ない。

■アジア

■モルディヴ

平和な世紀に向けて

アホメッド・シャーヒッド・アブーバクル
（教員グループ）



私たち人間はこの世の中を支配していると同時に、その保護と開発に責任を負っている。

有史以来数えきれないほど多くの文明が作られ、開発が行われてきた。これらの文明はいろいろな意味で世界の発展に貢献してきた。

しかしながら、これまでに残酷な戦争を数多く繰り返してきたという事実は、今日まで人間が果たした業績に傷をつけている。これまでに最も残酷だった戦争は第1次、第2次世界大戦であるが、それは私たちが現在生きている20世紀に発生した。この2つの大戦によって多くの人々の命だけでなく、莫大な数の貴重な文化的遺産が失われた。

私たちは今、21世紀という新たな時代に向かって準備を整えている。

私たちは平和な世紀を築くと決意したからには、過去の過ち（それは互いの誤解、友情、尊敬の欠如によって引き起こされたのだが）を繰り返すことは許されない。

青年招へい事業により、21世紀を担う今日の青年たちの間に理解と友情を深める機会が与えられた。

このプログラムの参加者として、たいへん貴重なものがこの計画により得られたと思う。日本を訪問することにより、日本人青年のみならず世界中の青年とのあいだに本当の意味での友情と協力

が築かれた。

このプログラムにより私たちは日本人の文化、生活習慣、価値観に触れることができた。日本人は、平和的で持続可能な方法により、国の開発を行うことに努めている。

また、この招へい事業により、私たちの心は真実の友情と愛、平和と調和といったものに啓発された。

日本で私たちが体験した「人にやさしい環境」は、若い世代にとっては理想的なものである。平和な未来を築くために青年はそのような環境で育てられるべきである。

最後にモルディヴ青年を代表して、このような機会を設けてくださったJICAに感謝申し上げたい。また、特にJICE、㈶ユースワーカー能力開発協会、㈶沖縄県国際交流財団を始め、このプログラムにかかわったすべての関係団体に感謝したい。

平和な未来を希望します。

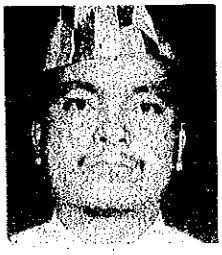
ありがとうございました。

■アジア

■ネパール

思い出の日本

ボージュ・バハドゥール・サーパー
（教員グループ）



日本はその外の顔と内の顔が違う国である。よその国のことは外から勉強できるし、その考え方や感じ方にできる限りひたることで文化も経験することができる。東京、徳島、広島、大阪、京都、どこへ行っても日本人はいつも礼儀正しく明るかった。平和を愛する国、仏陀の生まれた国、ネパールからやって来た私を日本人は歓迎してくれた。

私は日本の教育制度にはたいへん感銘を受けた。ネパールの教育制度は遅れており、社会や国が求めているレベルには達していない。

私はどこへ行っても臆せずにたくさんの質問をした。その質問に耳を傾け、きちんと答えてくれた人々に感謝している。日本の教授法や、人々の献身ぶりや、時間厳守や、規律は素晴らしいと思う。

文部省や学校や保護者たちは、問題の発見やその解決にとても気を使っている。ネパールでも教育は無料ではあるが(10年生まで)、義務制ではない。親が子供を学校へ通わせているかどうか、役所も誰も気にしていない。通常親たちは、子供を学校に入れると、あとは教師に任せてすべての義務から自由になりたがる。教育をきちんと受けた親たちでさえそのように考えている。これはネパールの悪い習慣である。

日本の道徳意識はとても高い。日本人は国や組

織のために自分に何ができるかを考える。高い税金を支払うことも簡単に受け入れる。だから日本は、あらゆる分野において目を見張るような発展を遂げることができたのだろう。社会正義や平和や安全も確立された。宮島にいる鹿は、その平和や安全の良い例である。

もうひとつの忘れられない思い出は、広島訪問である。広島の人々だけでなく宮島の鹿も平和を愛している。広島の平和記念資料館を見学した時は、心臓が止まりそうになった。私は1945年の8月6日を忘れない。どれほどその瞬間は残酷であったろう。資料館の展示物のすべてが被爆者の悲しみと怒りを伝えている。原民喜の詩が頭に浮かんだ。

これは人間の体です／原爆が何をしたか見てください／肉は恐ろしく膨れ上がり／男も女もひとつのかたまりのようになってしまった／はれた唇からしぼりだされる声／どうぞ、どうぞ、助けて下さいとささやく／これは人間です／これが人間の顔です

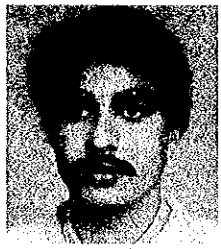
言いたいことはたくさんあるけれど書き尽くせない。日本の経済発展の奇跡、歴史、文化、そして教育。この1カ月はとてもおもしろく、思い出深い学びの日々だったことをうれしく思う。私たちは相互理解を通して友情を深め、平和や繁栄を築くという使命を果たすことができた。特に、合宿セミナーや徳島市で文化や歴史や教育の分野で交流することができた。日本政府とJICA、そしてネパールの政府と教育省に感謝している。日本での経験やさまざまなアイデアを、将来、ネパールの人々に伝えたい。ありがとう。

■アジア

■パキスタン

日本、その繁栄の源

アルシェッド・ホサイン・バッティ
（公務員グループ）



来日時の日本の印象は、高度に発達し、見事に体系づけられた城壁に囲まれた、物質的に発展を遂げてはいるが、人々は時計にがんじがらめにしばられ、毎日同じことの繰り返しをやっている、というものであった。つまり、同じことの繰り返しは彼らにとって一種の儀式のようなものであり、体系的に構築された、価値あるものに反抗することは、日本人にとっては考えられもしないことにちがいない、ということだった。

しかし、1カ月近く日本各地を回ってみて、いろいろな日本人に触れ、さまざまな文化や伝統・しきたりに触れ、私の日本に対する見方、考え方は、より高度な、深いものとなった。そしてこの理解の深まりは、このプログラム中に私自身の日本人との接触と観察によって得られたものの結果である。

今回の日本滞在も終わりに近づいた今、出会った日本の人々、そして青年たちをとても身近に感じる。今や日本は世界の他の国々とかけ離れた存在、と思うことはもうない。日本人は、ふるまいも人とのつき合い方も、他の国の人々と同じであるということが分かった。では何が他の国より抜きんでているかというと、勤勉さ、謙遜、人を遇する際の温かさ等の、日本人の特性であろう。このような特色があるために、日本文化には、精神

的、心理的な矛盾があまり起きない。日本では伝統の継承と、技術の進歩が併存し、社会全体として発達、価値、そして結合がうまく織りなされている。

日本人は神経がこまやかでもの分かりがよく、優しい人たちだという印象を持った。日本人にとって社会で他の人と接触する時は、そもそも相手がいい人であるということが前提である。

もう一つ若い人と接して気がついたことは、現在、若い世代は文化的な多様性を模索しているということである。それは恐らく、アメリカの影響からくる英語文化の強襲がもととなっているであろう。しかし、私が思うにこれはたいした問題ではないと思う。これは弁証法の合成を通じての、より文化的進化に必要な自然なインプットであろう。

特に感心したのは、日本の至るところで見られる、信頼の雰囲気である。誰もが皆を信頼し、自分のことは自分で気をつけているようだ。うれしいことには、誰も社会に対しても、町中でも、不正を働く人はいない。

日本社会には神は必要ではないのかもしれないが、人間関係においては、確かに、神聖とも言えるアプローチがある。私はそれを強く感じた。種々の観察や、経験を通じて無意識的に、また潜在意識に残ったことは多いが、今、それを言葉にするのはとても難しい。一言で言えば、私にとってこの経験は、凝縮された異文化体験であった。この思い出はずっと長く私の記憶に残ることであろう。

■アジア

■スリ・ランカ

日本での1カ月

ナフラン・アブドゥル・ラフマン
(教員グループ)

日本での1カ月の間、いろいろなことを感じ経験した。いちばん最初に気に止まったことは日本人の人に対する態度だった。これは私だけでなく、他の諸国から来日するすべての人々が驚嘆することであるに違いない。日本人の態度は人々を満足させ、また時々申し訳ないと思わせる。ホテルで、店で、学校で、オフィスで、受付で、またどこでも同じ人に対して何度も繰り返し頭を下げている光景に出くわす。そういう人々にどうやって返答すればいいのか、混乱してしまう時もある。このような態度は称賛すべき点であり、人間のよい特質である。このように人のいい親切な日本人がなぜ第2次世界大戦で原爆の被害者になったのだろうと不思議に思う。日本にも人間はいるではないか。

日本は西洋の影響を受けながらも、食事、服装、住宅に伝統を残している。しかし一つ欠点をあげれば、西洋の影響を受けていながらも英語がお粗末であることだ。日本人が英語で会話できれば、今よりももっと国際交流できるのではないだろうか。

日本人は現在、世界中で有効なあらゆる便益を享受している。この理由の一つに第2次世界大戦が挙げられよう。日本は戦争がなければ国を発展させることができなかっただろうし、現在の便益

を享受できなかったのではないだろうか。個々の生活を向上する刺激として、戦争は日本の発展の一因となったと言えるのではないか。

日本滞在中、今までの人生のなかで最も悲劇的で忘れ難い経験となったのは広島訪問である。広島は第２次世界大戦で壊滅し、世界で最初に原爆が落とされた所である。原爆資料館を訪れた時などは、原爆で命を落とした被害者に対して気の毒に思わずにはいられなかった。戦争の被害や被爆者の絵、写真、像にふれ遺憾に思った。壁に刻まれた詩を読むと、平和を神に願わずにはいられない。今後このような戦争から人々を守り、夢でさえも戦争が現れないようにと祈らずにはいられなかった。もし世界中の人々がこの原爆資料館を訪れ戦争の悲惨さに接すれば、世界の隅々にまで平和を願う心が行き渡るであろう。資料館に刻まれた詩にある「戦争は人によって造られた」という一節は忘れない。この一節は分別のある人は平和のために犠牲を払うことを教えている。平和への薬は広島、長崎に見いだせる。この青年招へい事業はたいへん役に立ち、これによって多くのことを学ぶことができた。日本政府、そして参加者が、このプログラムに期待していることがいかに達成できているかは、すべて参加者である私たちの手の内にある。もちろんこのプログラムで得たことは将来本国で活用していきたい。

日本人を理解する一番の手だてとしての、ホームステイについて言及しないわけにはいかない。南西アジア諸国のすべての参加青年は、日本人家族との２泊３日の間、まるで自分の家にいるように感じただろう。改めて言えば、このプログラムは日本の歴史、文化、教育等を学ぶために、また日本とスリ・ランカ間の友情を深めるためにたいへん有効であった。

■アジア

■モンゴル

日本での感想

バンズラクチ・サムダン
（公務員グループ）

このたび、JICAによる青年招へい事業の一環として、私たちモンゴル公務員10人を日本に招へいし、合宿セミナー、地方自治体訪問などのプログラムに参加させていただいたことに対して、深く感謝の意を申し上げたい。

日本での滞在期間中、日本の経済・社会の発展、財政金融制度、国家及び地方行政による事業、中小企業への支援活動などに関する講義を受け、日本国民の生活、生活習慣などにふれることができた。また、京都、広島などでは名所旧跡を訪れ、伝統芸術やスポーツなどの施設も見学した。

合宿セミナーは、同年代の日本の若者たちと両国に関する情報、社会事情、お互いに関心のある事柄について意見交換を行った。

モンゴルと気候風土などが似通った北海道の帯広市の訪問は、最も印象に残るできごとであった。特に２日間のホームステイによって、日本の一般家庭の人々と知り合ったことは、忘れ得ぬ思い出となった。

被爆地広島では、平和記念公園及び資料館を訪れ、記録ビデオなどを見て、深い感銘を受けた。人類の歴史に二度とこのような悲劇が繰り返されないことを願ってやまない。

日本人の勤勉さや結団力の強さ、また国家社会のための献身的努力といった精神は幼い頃から培

われてきたものである。計画したことは必ずやり遂げ、時間を正確に守り、目的を達成するために努力し、自ら責任を果たそうとする日本人の国民性には非常によい印象を受けた。

日本人は教育を重視したおかげで、このような発展を遂げてきたが、近年になって、経済の発展は停滞を見せ、さまざまな社会問題に直面し、将来に不安を抱く若者も見受けられた。

開発途上国の青年を招へいし、日本や世界の果て状況を紹介することは、招へいを受けた国々の発展によい影響を与えるだけでなく、21世紀の発展のためには果たす役割も大きい。

今回の事業を通して、知り合った日本の方々とさらなる友情関係を築きあげ、情報交換を行っていくべきであろう。私たちは帰国後、日本についての情報を広めるだけでなく、両国間の友好交流の促進に貢献していくべきである。

「百聞は一見に如かず」ということわざを私たちは実感している。

モンゴルが選択した自由化市場経済の発展を支援し、全面的に援助していただいたことについて、モンゴル国民の一人として、今回のプログラムへの参加によって一層感謝の念を深めた。

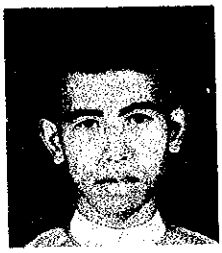
最後に、JICA、JICE、青年海外協力協会及び青年海外協力隊北海道OB会道東支部の皆様方に感謝の意を申し上げたい。

■アジア

■ミャンマー

名画のような研修旅行

ウー・テッ・ウー
(教育グループ)



こんにちは。

JICAの皆様と日本人のすべての方々に感謝の意を表して、今回の研修旅行の感想文を書きたいと思います。

私たちミャンマーの教育関係の青年たちは、JICAの招きで日本に来る機会を得ました。私たちが順調にプログラムに参加できるように、すべての点において支障のないよう注意深く取りはからってくださった日本の友人の皆様の誠意を、私たち一同、心の奥深く刻み込みました。

日本でのプログラム中はずっと、木々が生い茂り果実の実る花園を散策しているかのような気分でした。私たちを歓迎してくださった温かい真心に対して感謝するだけでなく、この素晴らしい花園を作り上げることのできる日本の方々の力を称賛してやみません。

プログラムの最初と最後の部分を美しい首都・東京で行っていただいたこともあり、今回のプログラムは美しい額で縁取った一枚の名画のようでした。熱海の合宿セミナーでのグループ別討論会は、私たちの人生で最も楽しいひとときになると思います。内容の深い討論をすることができたのは、日本語とミャンマー語の両方に堪能な通訳がいてくださったからだということができると思います。

神戸の見学旅行では、自然災害に真正面から立ち向かうことのできる日本人の能力をこの目ではっきりと見ることができました。朝来町のホームステイプログラムも、私たちは一生忘れることができないと思います。広島では、戦争の悲惨さが理解でき、世界の平和を目指して一致団結していきたいという気持ちがわきおこってきました。

その後、私たちは、日本古来の文化遺産の残る京都や、商業の中心地として発展してきた大阪などを見学することで、たくさんの知識を得ることができました。

日本の小中学校を訪問し、自分たちと同じ教師の方々や生徒・児童の皆さんと会ってお話をすることができたこと、そして教授法の見学をすることができたことなどは、お金では買うことのできないたいへん貴重な体験でした。

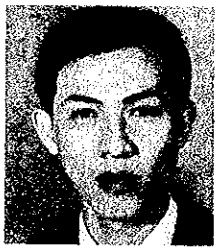
このプログラムは、最初から最後まで、あたかも一つの美しい物語のようでした。このような素晴らしいプログラムを実現してくださったJICAの青年招へい事業が将来も永久に続きますよう、お祈りしたいと思います。

■アジア

■カンボディア

大阪は赤いバラ

ゴーン・チャンブンテット
(教育グループ)



今回の日本での30日間の滞在は、私には初めてのことです。成田空港で飛行機を降り立ち、東京までバスで行きました。東京では約2週間滞在しました。それから、新幹線(日本で一番速い電車)で大阪市まで行き、大阪市には約1週間滞在しました。大阪は日本で東京についで第二の都市だと人々が言っているのを聞きました。その後、私は京都、広島へと旅を続けました。広島は日本で歴史のあるところです。私が見たすべての場所は興味深く、魅力的でした。私はこれらの訪問した場所がすべて好きです。

大阪市とはどんなところでしょうか？　大阪市はまさに日本第二の都市であるけれど、美しいバラのようだと私は思います。

大阪市に着いた初日に、私は何となく普通ではない気持ちを抱きました。何か奇妙な気持ちがしたのです。私は非常に興奮し、私の目は連なる山並みに真っ直ぐ向かっていました。私の目を奪ったのはこの山々の風景なのだ、と気づき始めました。山並みは私の息を奪いそうでした。山々は木でおおわれ、鳥がいて、道路、街道、光が走り、あちらこちらで光り輝いていました。そしてその上、鉄道が山々の中を通って走っているのです。すごいことです。ホームステイの中のある晩、私は、外に出て自分自身の周りを見回してみました。

私は空中にいるような感じがし、まるで鳥籠からたった今、抜け出たばかりの鳥のような自由な気分になりました。山々にはかつては木があり、動物、鳥がいて、光もなく真っ暗であったであろうと思いました。そして今は人々で溢れる街に変わり、そこらじゅう電気の光、また昼も夜も多すぎるくらいの自動車、バス、電車が上り下りしています。私は大阪の山々の景色ばかりでなく、港、歴史博物館、身障者スポーツセンター、学校やコスモスタワー、その他の見学した場所もたいへん好きです。

大阪市はまさに日本のトゲのないバラであると、心で思っています。そして私は本当にこの町を愛しています。なぜならこの町は私の心をとても温かくしてくれるからです。特に、山の景色は心の奥に深く刻まれています。この風景を生涯決して忘れることはないでしょう。

私はここで終わりにしたいと思います。日本の皆様のご幸運をお祈りいたします。皆様に神のご加護がありますように。

■アジア

■ラオス

日本でのプログラムに参加して

ブンセン・カムモンティー
（教育グループ）

まずはじめに、私は日本に研修に来る機会が与えられましたことを、一同を代表して、深く感謝いたします。この１カ月間の活動を通して、私たちはより広く、深い知識と経験を得ることができました。芸術や文化とともに、近代的で先進的な経済発展について知り得ました。

小学校から大学までの教育（学ぶことと教えること）において、すべての人に教育を受ける機会があるべきであり、その時に、その人の出自や能力（学力の有無）で選抜して機会を奪うことのないことが大切であることを理解しました。教育とは単に学生に学問的な知識を与えるだけではなく、お互いに協力する心や友人との友情を育み、読書の習慣、掃除、衛生についての知識、スポーツや芸術を愛し、文化を大切にする心などを育てていくものであるということが、今回のプログラムを通して心に残りました。

また、私たちは日本人の生活や習慣についても知り、理解しました。日本人は寛容な心をもち、他者に対してとても丁寧に応対します。考え方も純粋で、計画に沿って勤勉に行動します。

私たちは、ここで述べたような日本のシステム、仕事面での長所を習得し、国に持ち帰り、私たちの国の現状と時代に適合するようにいかしていきたいと思います。どうもありがとうございました。

■アジア

■ヴィエトナム

忘れられない思い出

ブィ・ヴァン・ハイ
(公務員グループ)

人口が多く、資源のない不毛の地。しかし、第2次世界大戦後、非常な努力によって、日本人が今日の日本を造った。本を読んで、私はこういうふうに日本のことを理解していました。

日本に来るのは初めてでしたから、私にとってすべてが新しいことでした。都会から農村まで、工場から畑まで、会社から家庭まで、どこでも皆一生懸命仕事をしていました。日本人がどうやってこんなことに素晴らしい国を造りあげたのか不思議に思いました。高層ビルや交通網や工場や公園など、どこでもたいへん清潔で整っています。人間が機械を造って、その機械でまた人間が重労働から解放されます。今回来日の目的は、日本にあるものを記憶するのではなく、国づくりのため、日本人はどういうふうに生活するのか、働くのかを学ぶということです。

そして、私の理解は、日本での滞在期間を通じてこういうふう変わりました。日本人は、仕事をする時たいへん勤勉で、規律を守り、責任感のある民族です。おそらく、個人の利益が社会の利益につながるように、と考えているからなのでしょう。日本人の青年は経済力がありますが、皆一生懸命勉強し、自分の専門のために常に学ぶ姿勢をもっています。日本人は豊かな生活を送っているにもかかわらず、あまり贅沢をせず、食事なども節約し、資源を無駄に使いません。

日本のさまざまな人々に会いましたが、庶民の日本人から高官の日本人まで、子供からお年寄りまで皆とても親切でした。感情を派手に表さないけれど、素直に生きてお互いを尊重し合っています。外国人である私でもまったく違和感を感じず、むしろ心通じ合うことさえ多ったのです。日本文化が、日本人の心に、人格に反映されていると感じました。自由経済によって日本の伝統文化を破壊させることなく、むしろよく保存されています。

国家秩序がしっかりするとともに、伝統文化が大切にされることによって、日本人の生活の価値観が作りあげられたと思います。私は日本に滞在中、あることを発見しました。つまり、自分の文化を大切にする民族で、また団結精神を持つ民族であったら、その国が必ず発展するということです。

30日間は本当に早く過ぎました。私はたくさんの新しい友達ができました。彼らと仲良くなり、素敵な思い出を作ることができました。私にとって、今回のプログラムは素敵な思い出ということだけではなく、有意義なレッスンでもありました。

日本よ、サヨウナラ。

さらなる相互理解ができた

ファン・コン・ルアン
(経済グループ)

ホテルメトロポリタンの近くのある郵便局の前に「大地震の経験を生かして」と英語で書いてある呼びかけの言葉を見た。これを見て考えさせら

れた。なぜ日本人は、経済発展や科学技術等の大事業を成功させることができたのか？　多くの山々や狭い段々畑が、旅行中私の目の中に飛び込んできた。大阪の、ある会社の壁に残る亀裂は阪神大震災の恐ろしさを物語っていた。

自然の脅威がきびしければきびしいほど、日本人は力強く発展にむけて邁進するようだ。関西国際空港や、世界一を誇る瀬戸大橋を見て、日本人は考えだす勇気、実行する勇気、そして最後までその目的を達成する勇気をもっていることが分かった。日本人はそれをどこから得るのであろうか？

詳しい本を読んでも、なかなかこれを理解できない。個人的には、これは日本の伝統的な教育のおかげだと思う。どんな文化、歴史、宗教に関係のある名所に行っても、制服でそろって規則正しく見学している多くの学生の姿を見かけた。大人のように落ち着いて考える様子とは違っていても、学生たちは自分なりに一生懸命観察し、細かくメモをとっていた。日本はそういうことができる余裕があるというだけではなく、明らかに、将来を担う世代の教育方法の素晴らしさが表れていると思う。伝統と民族の文化が継承され、奈良・京都の古城はきちんと保存されている。そのような場所に修学旅行の学生たちは丁寧に案内され、手厚く世話をされている。

実際会ってみた日本人は、私の想像していた日本人の性格とは違っていたので、少し驚いた。日本人は西洋人の雰囲気をもちながら、東洋人の謙遜で冷静沈着な態度をもっていることは印象的だった。案内またお世話してくださった皆さん、ホストファミリーの皆さん、そして道ばたで偶然に出会った人々にもそのような性格が現れていた。ディズニーランドの場所を探していた時に、心をこめてとても親切に案内してくださった人のことを今もはっきり覚えている。特に、私たちが交流した日本人は、正直でおとなしかった。ある青年はとてもはずかしがりやでもあった。

これからのことを考える時、どこの国に住んでいても、若者たちの幸福および平和、より良い世界を作りあげたいという気持ちは共通している。この出会いにより、お互いに理解することができた。

成功するためには、決断力という人間の素質がなければならない。松下電器産業の創立者、松下幸之助はその具体的な例だ。

1、2枚の紙上で全感想を表現することが難しく、またそれが20人あまりのメンバーの共通の感想を書き表すのであればなおさらだ。この感想は、日本での1カ月に及ぶ滞在のほんの一部分にすぎない。

1995年の秋は記念すべき秋になった。またその美しい秋が私たちの人生に深く残ることとなった。

新幹線の中で想うこと

ホアン・トゥアン・フォン
（農業グループ）

新幹線で私は東京へ運ばれ、楽しかった旅が終わろうとしています。新幹線の速さのように、日本での1か月の滞在もあっという間に過ぎました。ヴィエトナム人はこのような旅を「馬に乗って、花を見る」とよく言います。しかし、桜の輝く国の印象とよい思い出は、いつまでも忘れられません。

1945年に戦争が終わって、日本人は、強固な意志と気力で国力を回復し、発展しました。現在の経済の成功は、日本人が勤勉に労働した結果です。賢くて忍耐強い人々は、戦争での苦しみと失った

ものとを乗り越えて、「日本経済の驚くべき発展」を作りあげ、世界の列強の一員となりました。

徳島にある博物館を見に行った時、農家のお年寄りが、藁でできたぞうりを私に見せてくれました。彼が小さい時、それと同じような靴をはいていたことを聞いて、非常に感動しました。半世紀の時間が過ぎ、その藁ぞうりから、今日の日本人は日産やトヨタなどの世界で有名な車を持つようになりました。貧しい生活を脱し、現在、経済分野のさまざまな面で、日本は世界一になりました。私が行った所でも、成功した経済発展の様子はどこにでも表れていました。しかしながら、私には、日本の経済のいちばん成功した点は、高いビルや現代的な工業組合などにあるのではなく、貧富の差があまりない国民の生活にあると思われます。89%の人々が、中流生活を送っているということは驚くべき数字です。その上、都会と農村では人々の生活程度の差がほとんどありません。もし私が日本に定住するならば、農村に住むことにするでしょう。なぜならば、そこでは日常生活に必要なものは十分あるし、都会より自然環境に恵まれているからです。その上、人々は皆誠意と温かい心をもっています。農村では、伝統文化の価値がたぶん積極的に保存されていくと思います。徳島の阿波踊りは、にぎやかな音楽の中で踊り手が手を振り、見物人も一緒に踊りましょうと誘うようで、とても素晴らしく、魅力的です。文化、歴史の奇跡を通じて、日本人は自国の民族色を一生懸命に守っていることが分かります。しかし、友人の日本青年の何人かは、謙遜して、このことに関してはあまり成功していないと言いました。21世紀になって、アジア諸国の大きな挑戦は民族文化の特色を守ることにあります。日本とヴィエトナムのような、長い伝統文化をもっている国は特にそうです。

同じ東洋人で、黒い髪を持ち、箸を使う習慣のある、何千年前から仏教と儒教の影響を受けた日本人とヴィエトナム人は、相互理解も共感もしやすいはずです。

21世紀は各国の青年にかかっています。有益な、相互理解につながる交流は、間接的な情報より何倍もの価値を持っています。もし、各国青年がお互いに理解し同感できれば、世界の平和と人類の将来はもっと鮮やかに、揺るぎなくなると信じます。JICAの青年招へい事業の世界交流活動の目的は高尚で、かつ現実的です。この旅はその目的に従い、成功しました。

人類の願望の「平和と親愛な友情」という舞踏の中で、日本青年及びヴィエトナム青年が手をつなぎ、大きな輪を作ることができました。JICAの皆様に感謝いたします。

IROIRO ARIGATO GOZAIMASHITA。SAYONARA。

心に残る1カ月

トラン・レ・トラ
(教育グループ)

日本は私が幼少の頃からずっと夢を見ていた国です。日出づる国、桜がきれいな国、強い侍がいる国です。日本にいた1カ月間、私は日本について多くの新しい発見をしました。本を通して、日本について知っていたことと、実際に自分の目で見た日本とを、一生懸命に比べてみました。この短いエッセイの中に、自分の感じたことをすべて表すのはとても難しいことですが、簡単に言わせてもらえば、日本は完全な国ではありませんが、間違いなく限りなく多くの人が夢見ている国です。

来日前、日本について多くのことを聞いていたにもかかわらず、実際に自分の目で見た日本の首都、東京はあまりにも現代的で、あまりにも美しく、そしてあまりにも偉大であることに驚きました。

高層ビル、高速道路など、夜になるとどこにでもつくネオンの灯が眩しく映りました。しかし、それに慣れるとかえって私たちは東京の都会生活を息苦しく感じ始めました。ヴィエトナムと違って緑があまりにも少ないことが、そう感じさせたのだと思います。

石川県にいる間には、それと違ったことを感じさせられました。秋独特の美しい紅葉の色と、やさしい陽射しの色が本当に調和していました。まさにLevis Tan の絵の、紅葉の秋のようでした。

ヴィエトナムのことわざに、「家から出ると、多くのことを知ることができる」というのがあります。今回のプログラムを通して、私は日本に真似るべきことが二つあると思います。その一つは、日本人が仕事をしている時や、人と接触している時の姿勢、民族伝統を大事にしている態度です。

教育グループの一員として、私は、東京と石川県の小・中・高等学校を訪問することができ、どこの学校でも伝統教育は最も大切にされていることに気づきました。発展した国にとって、民族の特色を守ることはとても難しいことだと思いますが、日本は他の国と比べて、うまく守られていると思います。小さい生徒も伝統芸術が理解でき、伝統芸術を愛しているように感じました。先生や学生と話す時間がもう少しあれば、プログラムの目的である交流がもっとできたかもしれません。

もう一つは家族、友人、国から離れ、日本に来てまさか家族のように感じさせてくれる人たちに出会うことができるとは思っていなかったことです。ホームステイの家族、友人などは私にそう感じさせ、忘れられない思い出を作ってくれました。

有意義なこのプログラムに参加させてくださった方々に感謝いたします。

明日、ヴィエトナムに帰らなければなりませんが、私の本当の気持ちは「さようなら」を言いたくありません。なぜなら、ここで知り合った人々のことが大好きだからです。そしてきっとその人たちも私のことを好きになってくれたと思っております。お互い好きになったもの同士は必ずいつかまた会うことができると信じ、とりあえず私の好きな日本、そして日本人に「さようなら」を言います。日本での忘れられない思い出をたくさん作ってくれた日本人の皆さん、ありがとうございました。

■太平洋諸国・地域

■フィジー

日本での幸福な一夜

ロリマ・ラサルサ・ボサ
（公務員グループ）

ドアが開く音がして、耳をすますと岸川夫人が話す、私にも聞き慣れた来客を迎える時の日本語が聞こえてきた。しばらくすると、岸川夫人が私に中年の女性を紹介してくれた。

「ロリマさん、こちらはご近所で親しくしているタガワさんです。２人の息子さんがあなたに会いたいんですって」

「こんにちは。私はロリマです。どうぞよろしく」

私は、私の前で恥ずかしげに頭を下げている女性にあいさつした。

「もちろん。喜んでお会いしましょう」と私は付け加えた。

それは夜の８時半。私はホストファミリーとおいしい夕食を食べた後のひとときを過ごしているところだった。場所は那賀郡岩出町、和歌山県の小さな町でのことだった。

私が家の外に出て行くと、岸川家のちょうど反対側の家のドアの前に２人の男の子が座っていた。私に会うためにベッドに入る時間を遅らせていたであろう少年たちを見ると、私の心が動いて特別な感情がわいてきた。私の３人の子供たちのことが思い浮かび、２人の少年に微笑みかけていた。私は自己紹介をして彼らの名前を聞いた。しばらくの間くすくす笑いが続き、恥ずかしげに彼らは自分の名前を言った。

「僕の名前はタカヒロで８歳です」

「僕はマサヒロで７歳です」と岸川夫人が通訳してくれた。

この間中、私は好奇心の強そうな幼い目で頭の先から足の先まで見られているのを感じていた。しばらく日本語でのささやきが続き、岸川夫人が私のほうを向いて言った。

「この子たちね、あなたの髪や体に触ってみたいんですって」

「もちろん」

私は答えて、彼らのほうにかがんであげた。

すぐにマサヒロの声がして皆が笑った。

「あなたの髪はスポンジみたいですって」

私たちはみんな一緒に笑った。

いくつもの質問がなされて、私たちは座って、楽しい時を過ごした。しばらくすると岸川夫人がもう一つの質問を通訳してくれた。

「マサヒロくんが、あなたがフィジーで犬を飼っているのか知りたいんですって」

「私は子犬と親犬を飼っているよ」と私は答えた。

また、岸川夫人が通訳してくれた。

「タカヒロくんが、犬が何て鳴くのか知りたいんですって」

私が答える前に皆が笑った。

「バウ、ワウ」

「日本では何て鳴くの」と私が聞いた。

「ワンワン」とタカヒロが答えた。

「君の家の犬は日本語を話すんだよ。私たちの犬は、英語を話すんだよ」

私が答え、岸川夫人が訳してくれると、皆で大笑いした。

その夜、床についてから、私は日本の人々について考えた。私は活気あふれた東京で、友好的で、心温かく素晴らしく気のきいている人たちを見た。しかし特別な感情がわくことはなかった。ここで

私は日本のもう一つの面、地方の生活を体験した。のどかな雰囲気で、時間はゆったりと流れていた。ここに来れば素晴らしく友好的で、心温かく、愛すべき日本人に会えることは間違いない。美しい国、そして素敵な人々。

キリスト教徒として、この国とその人々に神と主イエスキリストのご加護があることを祈ります。そして、御心に従い私を違う意味で感動させてくれたこの国に、福音のよい知らせを持って再び戻ってきたい。

■太平洋諸国・地域

■パプア・ニューギニア

二つの文化をつなぐもの

カバナ・マフム
（公務員グループ）

私はパプア・ニューギニアでこれまで公務員として15年間従事し、かなりの海外旅行を経験していた。しかし今回、29人のパプア・ニューギニア人（公務員10人、教員19人、そしてジャーナリスト１人）とともに成田国際空港に到着した時、これからいろいろなことを学び、それは今までの海外旅行のなかで一番のものになるであろうという予感がした。実際、私はこれから展開することに対してなんの準備もできていなかった。特に日本の真のおもてなしに対しては、完全に無防備であった。

パプア・ニューギニアでは、日本人は攻撃的で外国人や他の人種に好意的ではないと見られている。しかし30日間の日本滞在によって私の日本人や日本に対する印象や考えは完全に変わった。

太平洋諸国、特にパプア・ニューギニア公務員グループに準備されたプログラムはとても効率よく素晴らしいものであった。私たちはすべてのプログラムを楽しんだ。特に富山での地方プログラムはよかった。みなさんも富山に行けば私の言っていることが分かるだろう。個人的にはホームステイがよかった。私を受け入れてくれた沢田一家は富山市から車で１時間以上もかかる所に住んでいた。会社員である康則さんが翌日、車で街を案内してくれた。私は日本の典型的な地方の自然の

美しさに目をうばわれ、風景の美しさに感動した。

翌日の夜は、私のホームステイ先である城端町で大がかりなお祭りがあり私も参加した。いろいろなグループが入れ代わりたち代わり、日本文化の一つである素晴らしく美しい踊りを次々と披露していた。私も街の通りで行われている踊りの一つに参加し、ちゃんと証拠写真も撮った。どの場面も魅力的でたいへん思い出深い。

3泊4日のホームステイを終えて、日本人は神聖で恵まれた環境にあり、いかに歴史を重んじ、勤勉で、控えめで、礼儀正しいか称賛せざるを得なかった。

日本でも一番、といわれる富山に行けて、とても光栄だった。富山では、二つのまったく違う人間と文化をつなぐものがさらに強くなっていくことを感じた日々だった。私たちが涙を流し、新しい日本の家族である、兄弟姉妹、両親、そしてお世話になった人々に手を振っているその時、これこそ本当に二つの文化の絆が培われた瞬間なのだと思った。ありがとうございました。パプア・ニューギニアそして日本の皆様に神様のご加護がありますようにお祈りしております。

本当の日本、ホームステイ

ウェンディー・ウランボ
レネ・ラシン
(教員グループ)

1) 本当の日本

パプア・ニューギニアの若い世代は、お年寄りから戦争中の日本軍についていろいろ聞かされてきた。日本兵は、何の落ち度もないパプア・ニューギニアの住民を、米軍を支持したということだけで、過重な労働を強いるなどして罰を与えたと聞かされた。だから私たちは、日本人は冷酷な民族だと思って育ってきた。

しかし、今回の日本訪問は短い滞在ではあったが、私に日本及び日本人についていくつかのことを教えてくれた。世界で最も発展した国であるが、人々は慎み深く親切であった。ネオンライト、雑踏、高層建築物に自然がよく溶け込んでおり、人々によって歴史的建物や場所がよく保存されていた。日本人はたいへん知的で現代的な生活を送っているがとても控えめであり、日本の若い世代は伝統的な日本の習慣から最新の発明まで、どちらにも接し勉強する機会を与えられていた。そして、日本は将来を見据え、予想される困難にもその解決策を見つけようとたいへん努力していた。

日本は他国の助けを必要としない独立した国であるが、助けを必要とする他国へ援助の手を差し伸べようとしている。私は、日本が援助の手を差し伸べることによって、過去の過ちを償い、謝罪しようとしていることを素晴らしいと思う。お互いに、相手を「認め合い」、「許し合う」ことによって、世界をより住みやすい場所にしようではないか。

2) ホームステイ

ホストファミリーが私たちを迎えに来るのを待つ間、私たちのグループ（教員18人、公務員1人、新聞記者1人）のメンバーがどんな思いでいたかとても想像がつかないが、全員不安な気持ちでいっぱいであったことは確かであろう。

850以上もの異なった言語と習慣が混在する国から来た外国人を、受け入れるホストファミリーもまた不安であったに違いないが、貴重な時間とプライバシーを犠牲にして、温かく私たちを家庭に招いてくれたことに心から感謝したい。

肌の色が異なる上に日本語をほんの少ししか話せない人間を、自分の子供として、あるいは自分の兄弟として家に招き入れることを考えれば、ホストファミリーがどんなに不安だったか想像できる。

しかし、9月17日、琵琶湖ホテルのロビーで、ホストファミリーと別れる際の皆の涙で真っ赤になった目が、どんなにホームステイが素晴らしかったかを物語っていた。

とても言葉では表すことができないが、もう一度ホストファミリーとJICAに感謝したいと思う。

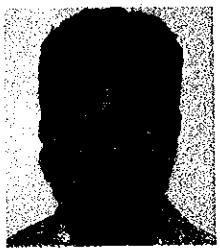
IROIRO ARIGATO GOZAIMASHITA!!

■太平洋諸国・地域

■ソロモン諸島

知らなかった人々

アリ・ツハヌク
(太平洋混成 公務員グループ)



青年招へい事業のプログラムで来日するに先立ち、日本の政治経済について少し勉強しました。しかし残念なことには、社会の最も重要な構成要素――そこに住む人々のことはほとんど知りませんでした。

実は、私は日本人に対してかなり否定的な見解をもっていました。日本人とは、いろいろな面で無礼で非人間的な人だとずっと思っていました。私がこのように思っていたのは、第2次世界大戦について学んだことや、わが国に日本からやって来る漁師や木材伐採者との限られた接触に起因するものでしょう。

私の日本での1カ月の滞在は、このような私の日本人観を完全に変えてしまいました。日本人が外国人に対してのみならずお互いに抱いている深い敬愛の念に、強く心を打たれました。私たちは日本中どこへ行っても、予想もしなかったほどの大歓迎を受けました。

都市の清潔さと自然の美しさも印象深いものでした。日本は世界の中で最も美しい国の一つであることは間違いありません。

最後に、一つだけ言えることがあります。今回の日本への旅で、日本の人々が、今まで会った先進世界の人々のなかで最も丁寧で心温かな人々だということが分かった、ということです。これこ

そ、私が国に帰ったら家族や友人たちに伝えたいことの要なのです。

■太平洋諸国・地域

■西サモア

最後の瞬間

モエイマノノ・フォウヴァア
(太平洋混成 教員グループ)

8月の終わりから9月の終わりを迎えるまでに、私たちはさまざまなことを体験した。太平洋諸国の仲間とともに、教育にかかわる広範囲な問題を数多く話し合うことができた。そして、それぞれの教育制度を学んだことは印象深かった。

日本人参加青年と意見を交わし、神から授かった特別な贈り物である能力をいかすために多くの有意義な考えを出し合った。

私たちは皆、同分野の若い人たちと意見を交わし、お互いがどのような考え方をしているか知ることを楽しみにしていたので、こういった話し合いは最も重要な時間であった。

私たちは太平洋諸国の教育現場で起こっている問題を日本の問題と比べてため息をつかずにはいられなかった。さらに、たくさんの教育問題の解決の糸口を見いだそうとした。教授法についてもふれ、習得の効果を高めるような有意義な教授法を話し合った。

また、私たちは教育分野の訪問で他県を訪れる機会に恵まれた。そこでは県独自の芸術的で創造的な側面を垣間見た。さまざまな学校も訪れ、そこで教育に使われている施設や教材を見ることができた。

金沢と京都で、私たちは多くの芸術的な場所を訪れ、そういった築造物がどのような背景で、ど

うやってできたのかを学んだ。さまざまな展示物を味わい、鑑賞した。

広島では、日本の平和の礎を見た。映画を鑑賞し展示物を見て、私たちは日本人の気持ちになり、心は深い悲しみとやるせない気持ちでいっぱいになった。そこには、勝者も敗者もなかった。いるのは神とキリストのみであった。世界中で人々が平和に暮らせるように、共に立ち上がろう、そして互いを思いやり、愛し合うことを皆で示そう。

太平洋のさまざまな島国からやって来て、日本でたくさんの有意義なことを学んで、私たちは胸の躍るような気持ちと感謝の念でいっぱいだった。日本で得たことは、あたかも空きバケツに水を満たすように、私たちの仕事の手助けとなるだろう。特にグループディスカッションと合宿セミナーが有意義であった。これはプログラム中最高のものであった。参加者全員がよくやったと思う。

最後に、素晴らしい仕事をしてくださった通訳の皆さん、プログラム中ずっと同行してくださったコーディネーターの高野慶子さんとプログラムコーディネーターの八木陽子さんにお礼を申し上げたい。また、日本ユース・ホステル協会、石川県ユース・ホステル協会の皆さんにも心から感謝したい。私たちは皆さんのことを一生忘れないだろう。

また、このプログラムの中心であるJICAに、宿舎、見学、手当てなどの面で私たちを支援してくださったことを感謝したい。すべてのことにお礼を申し上げたい。

1995年度青年招へい事業に捧げる：(歌より)
私たちは皆姉妹、兄弟
私たちは皆一つ
どんな国から来ようと
私たちはいつだって一つ
私たちは皆姉妹、兄弟なのだから
私たちは皆一つなのだから
どんな島から来ようと
どんなグループに属していようと
私たちはいつだって姉妹、兄弟
私たちは皆一つ

私たちは今さよならを言う
あなたを忘れることはない
私たちは皆姉妹、兄弟なのだから
私たちは皆姉妹、兄弟なのだから

■アフリカ

■モロッコ

夢から現実へ

イマニ・ナワル
(教員２グループ)

アフリカの青年すべてにとって日本旅行は夢である。確かに日本は遠く、物価が高くて人口過剰の国である。しかし注目すべき切り札を持っていて、先進国のなかでも最も魅力的な冒険を私たちに体験させてくれる。

まず成田から東京までの道のりは、私にとって日本の発展について知る上での、素晴らしい手引きとなった。田畑や林に囲まれてぽつんと建っていた農家がだんだんと都市部の住宅に移り変わり住宅はまただんだんと密になり、さらには東京のビルのはてしない大海の中に飲まれていった。まさに正真正銘の経済の都である。

大阪、京都、広島での滞在はとても興味深く実り多いものだった。夢のような眺めに見とれたり、寺、城、神社のような巨大な建造物に感嘆した。また一方で、ボランティアや教員と話をする機会にも恵まれた。彼らはお茶やお花といった日本の作法について説明してくれた。

最後に、最も印象的だったのはホームステイでの経験だった。この素晴らしい経験は一生記憶に残るだろう。彼らの歓待と親切、そしてモロッコの慣習や作法を知りたいという願望にたいへん心を打たれたからである。

私が思うには日本の強さは、西洋文明と日本の伝統の両方に帰すべきものであり、そしてこの二つが比類なき独自の文化的背景の中で溶け合っているのである。

日本の皆様にこのささやかな詩を捧げる。

熱心で頑健、連帯と謹厳、
日本人は彼らの大切な夢をかなえた。
今日の日本の素晴らしい生活、皆がそれをうらやむが、
日本が終わりなき大国になるために耐えてきたものを忘れてはならない。
覇気と幸福をあなたのために祈る。

平和と繁栄のうちに21世紀に共に立ち向かおう

エルアムラニ・アブデルカリム
(経済開発公務員２グループ)

JICAの企画によるアフリカ青年のための「青年招へい事業」に参加すべく日本にやって来る前、私たちにとって大いなる神秘と映っていたこの国について、私たちはいくつかの問いを胸に抱いたのでした。

パリでの事前オリエンテーションの折に、初めて日本の人たちと接して以後、とりわけ日本語の初歩学習とともに、この神秘は明らかになり始めました。日本へ行ってその新たな世界を発見したいという私たちの思いは、パリで過ごす日を追って強まったのでした。

１カ月に及んだ、私たちの生涯忘れ得ぬ日本での日々は、今後、私たちが世界を見る目に影響を残さずにはいないでしょう。

私たちの日本滞在についてひとことで語るのは、

私たちにはひどく難しいことと思われました。私たちが受けた文化的、人間的な衝撃は、非常に大きかったのです。

すべてをことごとく並べたてるのはやめ、日本滞在にかかわる私たちの印象について、以下のことを述べるに止めましょう。

まず初めに、このプログラムの成功のために払われた尽力に対して、プログラムの企画・準備に携わったすべての方々に称賛の意を表します。このことからは、日本人の仕事の特徴である、厳密さと効率を感じとることができました。

本プログラムの多様で豊かな内容により、私たちは日本と日本の人々をよりよく知ることができました。多様だという理由は、プログラムが日本の経済・社会生活の数多くの局面を間近に見、正しく評価する機会を与えてくれたからです。豊かだというのは、一つには日本の若者たち、企業家、管理者の方々と直に気安く接し、実り多い議論をしたこと、またホームステイ先で過ごした心地好い滞在のことす。それは間違いなく、私たちの日出づる国の旅のうち、最も忘れ難い出来事として刻まれています。

私たちは大いなる敬意を以て、他者の尊重、寛容、鷹揚さ、仕事における粘り強さ、全地球上に平和をもたらすための決意、という諸々の高貴な価値への日本人の専心ぶりを見て取ることができました。創造精神と結びついたこれらの価値により、日本はその経済・社会の発展に成功し、普遍的なモデルと呼びうる新たなモデルを実施することができたのです。私たちはこの発展の質を見極める機会を得ました。瀬戸大橋の眺め、道路網、数多くのトンネルを見て、私たちは眼の眩む思いをしたのでした。

こうした一般的な印象を超えて、私たちは学校教育、職業訓練及び人材配置の分野での実効性の高い制度によって生み出された、人的資源を基盤とした日本の豊かさに、とりわけ感銘を受けました。

最後に、この機会を借りて、企画・準備担当のすべての皆さんに、この大国での私たちの滞在期間中、特段の配慮をしてくださったことについて、厚くお礼を申し上げます。

私たちは、私たちが結んだ友情の絆が永続しうるよう望んでおります。この共通の目標は、以下のことによって達せられるものと思います。

アフリカと日本の青年たちを集めたクラブの創設

日本青年のためのアフリカへの招へいプログラムの企画

最後に、この呼びかけをさせていただきたいと思います。

「世界の平和を実現すべく、手に手を取って、共に栄えよう」

■アフリカ

■スワジランド

想像を超えて

マコーシャ・マンタータ
(教員1グループ)

私はこれから日本に向けて出発しようとしている。しかし、私は世界で最も人口密度の高い国の一つである日本で、1カ月も過ごすことができるだろうか。私は、ストリート・チルドレンや物乞い、失業者、すり、行商人でいっぱいの汚い町を歩いている。この通りの先には掘っ立て小屋の町があり、そこでは狭い一部屋に10人もの家族が住んでいて、日々の糧を得るのに精いっぱいの暮らしをしている。子供たちは学校の帰り、バケツの水を家に運ぶ。衛生状態は劣悪だ。ここには留まりたくない。しかし、この通りから少し離れた住宅街では、2階建ての邸宅、大邸宅、バンガロー、高級車、衛星放送用アンテナなどが見受けられる。その通りに人影はない。もちろん社会基盤は整備されている。ここが大多数の人が住みたいと思っている街だ。地方での暮らしは、掘っ立て小屋の町より、よいとは言えない。

東京のホテルメトロポリタンにチェックインしてから、散歩することにした。ひんやりした夕方で、街は若者から老人まで多くの人でごった返している。あちこちにネオンが輝き、店やレストランはきちんとした身なりの人々でいっぱいだ。学生たちは学校帰りで、制服姿だ。これが日本人の生活なのだ。物乞いやストリート・チルドレンはいない。私の想像と何と違うことか。

日本人は実際に簡素な生活を営み、伝統、文化を大切にしている。平均的家庭は3～4人の家族構成だ。家の中では靴を脱ぐという文化があり、おじぎは尊敬を表す。寺、神社、博物館、城、庭園はよく保存されていて、日本人が大事にしている歴史が理解できる。現代の家にも、畳、日本式の風呂があるし、神棚がある家もある。

教育も重要だ。これは、幼稚園、小・中・高等学校と大学の数からも明らかだ。これらの学校は十分なスタッフをかかえ、最新の設備をそろえている。学校のカリキュラムは労働市場にすっと入っていける責任ある市民をつくりだすためのもののようだ。学生は家より学校で過ごす時間が長く、先生はまるで一日24時間働いているようだ。

技術が進歩していることは、ほとんどの家庭で容易に気づく。たとえば、テレビ、ビデオ、ラジオ、ピアノ、洗濯機、電話、車などは、どの家庭でも見受けられる。

私の日本のイメージは今ではすっかり違ったものとなった。人々は礼儀正しく穏やかである。また、時間がよく管理されており、文化は大切に保存されている。技術には目をみはるものがある。こうしたことによって、日本は住むのに快適な場所となっているのだ。

■アフリカ

■トーゴー

プログラムについての感想

コクー・アグベシ・ゾム・ルウ
(経済開発公務員3グループ)

日本の滞在中、私たちは経済、社会、そして文化面において多くのことを発見できた。企画準備は完璧であり、プログラムはほぼ完全に実行された。そして、私たちは、あらゆる年齢層の日本の方たちと親交を深めた。

日本の生活水準は非常に高く、私たちアフリカから参加している青年にとって、物価はたいへん高かった。

私たちは日本が成し遂げた経済、産業および技術の発展と同時に近代文化と伝統が完全に調和していることにたいへん驚いた。講義は、内容の濃いものであったが、通訳に不十分な点があった。青年に与えられた質疑応答の時間も少なく、将来の改善点である。なぜなら、青年にとって理解するためには多く質問する必要があるからである。質問と答えを通して知識が得られる。

宿泊といろいろな便宜については、すべて私たちがくつろげるようになされていた。

また、食事については、言うことはない。ただ、岡山では、この計画を準備してくれた方の配慮からか、メニューや時間が決められていたために、かえって参加者の一部には宗教や健康上の問題が生じた。

全体的には、私たちの日本滞在は順調にいったと思う。プログラムは参加者が日本人という国民と、日本の経済、産業、文化の驚くべき質の高さから多くを学ぶことを可能にした。

■アフリカ

■ウガンダ

Nagato-City 私の新たな故郷

サラ・バーバラ・マイヤンジャ
（経済開発公務員１グループ）

私が最初にホームステイプログラムについて聞いた時、とても心配になり、心の中で、これはキャンセルになってくれと祈ったものだった。しかし、そうはならず10月27日金曜日、すべての青年はホームステイに行くことになったのである。

ほかの青年たちとは違って（注：ウエルカムパーティーでファミリーに会っていた青年もいた）私は、ホストファミリーに初めてその日に会った。私は秋のそよ風に揺れる木の葉のようにすっかり震えていた。しかしほっとしたことに、今井夫妻はたいへん素晴らしく温かみにあふれたご夫婦だったので、長門市に向かう時までには、私たちはお互いにすっかりくつろぐことができたのだった。今井家のお宅で日本のお風呂に入る機会に恵まれた。最初はあまり気がすすまなかったが、なるほどたいへんくつろげる楽しい経験となった。

長門市では、私が最初の黒い人間であるということが分かった。それで人々は好奇心をもって私を見つめ、話しかける者さえいた。他の者は私のホストファミリーに私が誰なのか聞いてきた。おもしろいことに、70代の女性は私のことを〝大きな目の大きな人形〟などと言ったりもした。ホームステイ中、私はチャパティとチキンシチューを料理したが、家族は心ゆくまで堪能したようである。なぜならホストの子供の１人TAKESHIが食べ物がこんなにおいしいならアフリカに喜んでいくと言いだしたのだ。しかし、彼はアフリカの野生の動物が怖いと言っている！　また、日本人が大好きな魚介類は私は食べられないのにもかかわらず、ホストのお母さんが料理してくれた海老は食べることができ、しかも大好きになってしまった。そんなこともステイ中にあったことである。今井家とともに、私は初めてボウリングを経験した。とてもおもしろいゲームで、またファミリーは私が初めてにしてはなかなかうまいとびっくりしていた。

ホストファミリーとの週末は本当に素晴らしい経験であった。しかし、諺いわく〝良きことすべて終わりが来る〟。そう、私たちはほとんど涙にくれながら、また連絡を取り合うといったさまざまな約束をして別れたのであった。

結論をいえば、ホームステイはこの青年招へいプログラムのなかで最も素晴らしい思い出になるプログラムである。私はこのプログラムを通じて新しい家庭を長門市に得たのだから。

今井ご夫妻とその家族の皆様へ――いろいろありがとうございました。――そして神の祝福がありますように！（〝GOD BLESS YOU !〟）

3.合宿セミナー参加日本青年の声

Vessel name "ASIA"

山本　美和子
(会社員)

近くても遠い国が多いアジア——。今回のセミナーは、私に多くの発見と感動、そして日本人としてのアイデンティティーを問い直すいい機会を与えてくれた。

マレイシアは多民族国家である。マレイ系、中国系の2大民族が全体の約90%を占め、これにインド系や先住民の人々が加わる。だがここに、民族構成比のもたらすさまざまな問題が潜んでいることは確かだ。"マレイ人優遇政策(ブミプトラ政策)"なるものの存在も、それを裏付けるいい例だと思うが、それでもマクロ的視野に立ってみれば、日本よりもよほど積極的・建設的に民族間の共存・共生を図っていると感じた。日本も純単一民族国家とはいえない。アイヌ民族をはじめ在日朝鮮・韓国人、何世代にもわたり日本に暮らしている華僑の人々の存在に加え、さらには近年、日本に留学・就労に来る外国人の増加に比例するように国際結婚も増加の傾向にあり、今後ますます多民族国家の様相を呈していくことだろう。

このように日本に生活する外国人は多い。とりわけアジアの人々の存在は、既に日本社会の一部分を担っているほどだ。しかし、彼らと交流をもち、言葉や文化の違いを超えて心の通い合うつき合いをしている人は、果たしてどのくらいいるのだろう。私たち日本人は自分も一アジア民族にすぎないということをもっと自覚し、彼らと相携えていく必要がある。

今回のセミナーを通じて痛感したのは、アジアというのはまさにそれ自体が一つの多民族国家であるということだ。私たちは、「アジア号」という一つの船に乗った、同じ"アジア民族"なのである。船長も船員も船客も、私たちアジア人である。針路も舵取りも、すべて私たちの手に委ねられているのである。

刺激的な出会い

田中　康一
(会社員)

佐島マリーナで開催された合宿セミナーの3日間は、非常に意義のあるものとなった。日頃外国人と接する機会が少ない私にとって、フィリピン青年との交流は、日常では感じることのできない新鮮で驚きに満ちたものだった。日本人とは違うフィリピン人の国民性、考え、価値観に触れ、さまざまなものへの"気づき"がたくさん芽生えた。

初日に行ったレクリエーション、交流会では、喜怒哀楽を隠さない表情豊かなフィリピン青年たちの姿があった。そんな彼らの人柄の素晴らしさに驚き、そしていつの間にか自分も彼らと同化していることに気がついた。

そんななかでも、今回いちばん驚き、感銘を受けたのは分科会であった。フィリピン青年とさまざまなジャンルのトピックスについて真剣に話し合ったなかで、彼らの自国に対する熱い思いがひしひしと伝わってきた。現在のフィリピンはお世辞にも経済的に豊かとは言えない。むしろ経済的に開発途上である。容易には解決できない問題が山積みである。しかし彼らは自国のことを真剣に愛し、自らの手で自国を良い方向へ導こうとする気概をもち、未来に向かって建設的なのである。

昨今の日本はどうであろうか。経済的には豊かになり、周囲にはモノが溢れている。しかし政治や経済に無関心になり、自らの手でこの国を変えていこうとする明確な将来への夢やビジョンをもたずに、刹那的に生きている若者が多すぎるのではないか。

人間は自分への理想を抱き、それを強く念じていれば自分自身を変えられる生物である。彼らを見ていてそう感じた。そんな問題意識を投げかけてくれた3日間だった。

初めて合宿セミナーに参加して

重久　則子
（公務員）

7月7日から3日間、神奈川県の佐島マリーナで、バングラデシュの人たちとの合宿セミナーに参加しました。初めての参加で緊張気味のスタートでした。

グループ討論、レクリエーション、交流会と盛りだくさんの内容で、あっという間の3日間でした。

グループ討論では、それぞれの国の事情を説明するだけで時間が過ぎてしまい、もっといろいろなことが聞ける時間があったらと、残念に思いました。

外国といえば、アメリカ、ヨーロッパ等、観光地として有名な場所にしか、目が向いていなかった私ですが、アジアにも興味をもつようになったのは、今回のセミナーがきっかけとなりました。

スタッフの皆様には、たいへんお世話になり、感謝の気持ちでいっぱいです。特に、言葉の分からない私が、グループ討論で楽しい時間がもてたのは、通訳の方々の努力によるものと思っています。

今回のようなセミナーに参加する機会はもうないと思いますが、普段できない貴重な体験ができ、

おもしろかった3日間でした。

言葉の違い、短期間ということで、十分に知ることはできなかったと思いますが、バングラデシュという、まったく知らなかった国が身近に感じられ、もっといろいろな国のことに、興味をもっていきたいと思っています。

ネパール青年教師から

半田　好男
（公務員）

「生徒をもっと自由にしてあげれば……」双方の教育事情を話し合った時の、ネパールの青年教師の最後のひとことだった。夢のような発展を遂げた日本から学び、自国の教育に生かせるものはないか、と真剣な思いで参加したであろう合宿セミナー。自分たちは学ぶ側であると思っているためか、かなり控えめではあったが、彼からさらりとこぼれたフレーズに同じ教育に携わる私は「いかにも」と唸ってしまった。

教育関係にテーマを絞ったディスカッションを行ったが、最初は戸惑うことばかりであった。あまりに違う互いの国の現状を理解し合うことなしには、話が進まなかった。彼らは日本の高学歴社会に驚き、どのようにしてできたのかと尋ねてくる。日本の教育をモデルとして、ネパールの低い就学率を改善する手がかりを見つけたいようだった。私たちも役立つことを答えたいが、ネパールのことをほとんど知らないため返答に戸惑った。

日本の教育の問題点にも話が及んだ。進学の名のもとに自由の少ない教育環境、受験勉強を目標とした結果、社会に出るために新たな目標を探さねばならぬ大人たち……。ネパール人からすると勉強に専念できる環境は一つの理想である。日本が抱えている教育問題も、彼らにとってはまだまだ到達し得ない未知のレベルというものの、大きな関心を寄せていた。それだけに、冒頭の的を射たアドバイスは強いインパクトがあった。多くの日本人が日頃から感じている問題を、異郷で育ち、来日間もないネパール人が鋭く見抜いたのだ。

彼らが日本訪問により何かをつかんだように、私たちもまた得るもの大であった。彼らからの言葉を、その後に生かして初めてこの合宿セミナーの意義が達成されるように思った。

最後に、この合宿セミナーを支えてくださった皆様に深く感謝いたします。

ダンニャバード（ありがとうございました）。

21世紀の社会発展の鍵は女性の社会進出!?

矢島　秀一
（団体職員）

JICAの招へいにより訪日したネパールの教員グループ（10人）と、日本人青年10人を迎え入れ、日本青年団協議会の主催により合宿セミナーが開催された。1日目、バスの中で隣り合わせになった者同士で自己紹介を兼ねての友好を育んだ。宿舎に着いて、オリエンテーションをすませ近くのグラウンド（芝）を借りて、スポーツ交流を行い、お互いの汗を通してその時間を楽しんだ。特にネパールの「カバティー」はルールも簡単で、和気あいあいで行えた。ネパール青年にとっても訪日して各プログラムを消化してから10日目を迎え、疲れのピーク時であったが、スポーツ交流は、この合宿セミナーをリラックスした雰囲気のもと友好を育み、有意義なものにするための潤滑油になり、たいへん有効であったと思われる。

2日目から2班に分かれ、それぞれテーマのもと話し合いがもたれた。私が入ったグループは、女性教育についてネパールの現状の報告があった。ここで浮き彫りになったことは、ネパールでは学

校に通う生徒の数は男子に比べ女子が絶対的に少なく、家庭においても子供は家事の担い手との考えが両親に根強くあることが報告された。ネパールでは、たとえ学校（日本でいう高校）を卒業しても、その受け皿（企業）がないに等しく、ほとんどが農業で生計を立てている現実を鑑みれば、教育や学校に行くことの意義がどうしても薄れてしまう。したがって、特に女子に対しては、学校で教育を受けさせるより、家の手伝いをさせたほうが家の生計を立てるうえでも、非常に大切な労力となると考えている。このような家庭（両親）の意識、経済事情では、女性教育の問題を、ただ教育上だけで考えるのは難しく、その状況を取り巻く経済状況や、暮らし、民衆の意識などのネパール社会全体の構造をも捉えて考える必要があるのではないか。

一方、日本では、義務教育を卒業した99%が高校に進学し、その3割程度が大学、短期大学に進み企業に就職するわけだが、女子においては、結婚、育児を境に会社を退職し家庭に入ってしまうケースが男性より圧倒的に多い状況を見れば、女子においていったい何割がそれまでに受けた教育を生かし切れているかは疑問が残るところである。また、女子が子育てや、家庭以外に社会に貢献できうる期間は、4大卒（22歳）で27歳（結婚の平均）で結婚退職するとして、せいぜい6年間程度で、個人差はあるにせよ、大方結婚までが女子にとって働くという社会的な貢献にすぎない。一人の立派な成人女性に成長させるために学校教育や習い事を含め多大な時間、費用を費やしたにもかかわらず、実際にその力を発揮できるのは家庭生活以外では非常にチャンスが少ないと思われてならないからだ。

もちろん、それには日本社会のなかに、男性、女性を問わず「女性は仕事より家庭」という古い習慣や差別ないし区別が底流にあるのではないかと思われ、ネパールの社会構造や意識状況と類似、共通している点だと思われる。一般的に社会がどれくらい民主的になっているかをはかる場合、女性の社会進出度を見るというが、その点、日本は欧米先進国と比べて女性が活躍できる土壌が少なく、女性の地位が低いと見るほうが妥当だと思う。

今回のネパール青年との意見交換を通して、日本も含めまだまだ多くの国々が社会のなかで、女性に対する差別または区別の構図を温存していることを気付かせてもらった。女性の地位の問題は、両国、世界にとって、大きな課題であり、より民主的に、差別のない、一人一人の人権を尊重できる社会を構築することが、21世紀の社会を発展させるための鍵ではないかと思う。両国の現在の社会状況は違うが、ともにそのような社会に一歩でも近づけるよう、青少年を指導する立場にいるリーダーとして社会にかかわることが私たちの使命であることを確認させてもらった。ともに頑張りましょう。

陽気なパキスタンの青年との交流

宮田　豊子
（会社員）

パキスタンと聞いても、具体的なイメージのわかない国です。インドの隣で、アジアというよりは、中東の一部という感じがしていました。今回その国の人々と会うことができ、少しだけ理解できた気がします。

まず第一に、思っていたより女性の地位が高いのだなという気がしました。私たちのグループのパキスタン側のグループリーダーはアイシャ（女性）がやっていましたし、ディスカッションが終わった後に日本人のグループでは女性のリーダーがいなかったと言われました。日本人の人たちはどうしてと聞かれて「うーん」とうなってしまいました。年功序列でリーダーは決めがちだからと

答えましたが、納得していない様子でした。

また、パキスタンの人はたいそう陽気なのには驚かされました。もちろん内気で、恥ずかしがり屋もいるのですが、ノンアルコールでも、歌や踊りが続々と出てきました。それは翌日のパーティーの飾りつけをしていた時で、本番のパーティーではなかったので、本当に歌や踊りが好きなんだなあと思いました。

このように自分の中で気づいた点は、イスラム教の国のイメージとのギャップです。知らない国に対するイメージは、宗教、社会制度、人種等により形づくられます。しかし、それは一面的であり、その国の人と話をして知る機会を得られてよかったなあと思います。

男は象の右足、女は象の左足

白石　ゆみ
（会社員）

「男は象の右足、女は象の左足」――これはタイ・経済Bグループのメンバーと3日間にわたる社会・労働環境についての議論のなかで、いちばん印象に残った言葉だ。

1995年、日本の女子学生の就職戦線は〝超氷河期〟とまで言われ、男子学生の同レベルの教育を受けてきても採用では歴然とした差別を受ける。また、仮に就職したとしても、その先には女性が仕事を続けるのに妨げとなる社会的圧力・環境から、多くの女性が仕事をやめていく。

タイのメンバーにこの話をすると、彼らは残念な様子でこう言った。

「昔はタイでもそうだったが、今は違う。僕の上司は女性だし、仕事の上で性別は関係ない。タイの古い言い回しでこんなのがあった。『男は象の前足、女は象の後足』しかし、今では『男は象の右足、女は象の左足』というように変わってきている」

正直なところ、意外だった。それは、タイが日本より遅れていると誤解していたからかもしれない。事実、インフラストラクチャー整備の面では、かなり遅れており、旅行中苦労した経験もある。しかし、こと性に対する意識においては、明らかに日本よりタイのほうが進んでいる。

彼らの性の意識の変化から、新しい考えを柔軟に受け入れるタイの度量の大きさを窺い知ることができた。もし、私たちがそれを見習うことができれば、性差別だけでなく、日本の抱えるさまざまな問題の解決の糸口になり得るのでは、と感じた。今回、私たちにいろいろなことを感じさせ、考えさせてくれたタイのメンバー全員に感謝の気持ちでいっぱいだ。

太平洋諸国の青年との交流を通して

仙波　友理
（学生）

今回、初めてこの企画に参加することができた。初めて太平洋諸国の人々と話し、また日本の公務員の人々の話も聞くことができ、たいちへん貴重な体験をすることができた。以下、思い出すままにいくつか述べてみたい。

彼らは聞いていたとおりとても友好的で、いつ

も笑顔で話しかけてくれた。競って自分の国こそ最も友好的で美しい島だと主張していたが、多分どれも本当なのだろう。

交流の夕べでは各国のダンスや歌を披露してくれたが、彼らは伝統的なダンスを自然に上手に踊った。日本人の生活には伝統的な盆踊りなどが根付いていないため、盆踊りも付け焼き刃的なものになってしまったことが残念だった。

彼らはほとんどが、彼ら固有の言葉と英語とのバイリンガルであり、流暢な英語を話したので、日本人はなぜ英語を話すことが不得意なのかと不思議がっていた。しかし彼らの国では、テレビや学校教育でも当然のように英語が使われているのに比べ、日本では状況が許せば日本語だけで生きていくことができるのだから、ある意味では英語を話せないのは当然なのだろう。中学校から英語を学んできた私だったが、使う機会のなさから会話の能力を磨かなかったことが悔やまれた。

また、彼らが日本人に質問することは、説明できないことが多く、異文化交流の難しさを感じた。たとえば、なぜいじめが起こるのか、なぜいつも時間に追いまくられるように生活するのかなど、価値観に関する質問は特に答えるのが難しい。私たちは自分の文化、価値観を当然と思っているため、「どうして」自分がそう思うのかについて説明を求められた時、大いに困惑するのである。

このように、今回の交流により、自分自身の認識を新たにできた。これを今後、人との交流に役立てていきたいと思う。

忘れかけていた熱心さを教えられて

田中　茂
（教員）

合宿セミナーに参加する前は、どのようなセミナーになるかと不安な気持ちでいっぱいであった。

しかし、パプア・ニューギニアのメンバーに会った瞬間から、メンバー一人一人の明るさに圧倒されるとともに、日本をより知ろうと、日本との友情を築こう。との思いを強く感じた。

私と一緒の部屋になったメンバーは、皆さんがとても紳士的で、とても心やさしい。

さっそく部屋に入ると、英語で話しかけられた。こちらも思い切って英語で答える。

日本の感想などを聞いた後、彼らがパプア・ニューギニアの様子を写真雑誌でていねいに話してくれる。私が知らない日本との貿易品（コーヒーやナマコ）があることも教えてくれた。話が弾むと、「一緒にビールを飲みながらやろう」ということになり、知り合ったばかりなのに、もうだいぶ前から知っていた者同士のようにうち解け合った。スポーツ大会では、ソフトボールをやって、お互いに楽しんだ。夕食では、パプア・ニューギニアのメンバーに「日本に来て食べ物で困ったことはないか」と尋ねると「日本の食べ物はとてもおいしい」と言ってなんでも食べていた。

２日目は、日本とパプア・ニューギニアとの教育・社会・習慣をめぐってのディスカッション。午前３時間、午後３時間はとても長いのではと思っていたが、熱心な討議で時間が足らないほどであった。その夜は歓迎パーティー。ここで楽しいレクリエーションとパプア・ニューギニアのメンバーによる踊りと日本のメンバーによる盆踊りの

交歓会となり、お互いの踊りを時間の許す限り踊り続けた。踊りながらパプア・ニューギニアのメンバーのこれからの日本での滞在が、より楽しく安全で有意義なものになるようにと、心から願わずにはいられなかった。

大笑い失敗談
——日本語は難しいかな?

松井　朋子
（公務員）

招へいされた青年はほとんどが、来日して初めて日本語を学んだのではないでしょうか。失敗にめげず習得していく彼らの姿がとても素敵だと思っています。合宿セミナーの時に、表情豊かな身ぶりで再現してくれた失敗談を二つ、披露したいと思います。お腹がよじれるほど笑ったよい思い出なのです。

その１　「わかりませーん」事件

Ｊ氏がレストランで食事をした時のこと。水のおかわりが欲しくなってウエイターを呼ぼうとしたのですが、なかなか気付いてくれませんでした。そこで彼は空のグラスを高く持ち上げ、大きな声で呼び掛けたのです。

「わかりませーん！」

賢いウエイターさんはすかさず水を持ってきてくれたそうですが、Ｊさん、いったい何が分からなかったのかな？

その２　「あけてくださーい」事件

私のルームメイトのＮさんの話。日本語のレッスンでＨ氏とロールプレイングをしました。Ｎさんはまず椅子に腰掛けてもらおうと思い、つい口から出た言葉は、

「あけてくださーい」

Ｈ氏は、待ってましたとばかりに、ニヤニヤっと笑ってＮさんの上衣の前ボタンに手をかけたのです。もちろんＮさんは大パニック。あとで聞いた私たちですが、Ｈ氏のうれしそうな表情と手つきのいやらしさが大いに場を盛り上げてくれた一件でした。

このな楽しい思い出と、真剣に話し合った時間を、どうもありがとうございました。立ち向かうべき問題はお互いに違うけれど、同じ地球に住む仲間として歩み寄り助け合えたらうれしいです。再会できる日を楽しみにしています。

素敵な時間をありがとう

須長　香織
（公務員）

「ASEAN青年と仲良くなれて、楽しい合宿セミナーを体験できるのか」。そんな思いを抱きながら合宿セミナーは始まりました。

集合したホテルのロビーやバスの中には、お互いの不安が見え隠れして、緊張感がありました。そんな私たちをリラックスさせてくれたのは、最初のプログラムであったスポーツ交流のインディアカでした。試合をしている人、試合を応援する人、試合に向けて練習する人、トリムバレーやセパタクロを楽しむ人と、それぞれでしたが、小さな輪が一つの大きなものになった感じがしました。そう思ったからなのか、２日目の分科会では、環境問題のほかにも、恋愛などについても話しました。

３日間のなかでもいちばん心に残ったのは、交流パーティーでした。ASEAN青年の方々に楽しんでもらおうと、私たち、日本青年は考えていましたが、ASEAN諸国各国の衣装や歌やダンスに、日本青年のほうが楽しませてもらい、ASEAN諸国への興味をかき立てられました。

合宿セミナーは、いつの間にか忘れていた、〝友達との時間を持つこと〟の大切さを思い出させて

くれる貴重なものでした。そして、そんな素敵な合宿で築いた友情をいつまでも大切にしていきたいと思っています。

ASEAN青年の皆さん、私たちは皆さんの思い出の中にいます。だから、〝さよなら〟ではなく〝また会いましょう〟と言いたいと思います。そして、合宿セミナーが、楽しかった思い出となってくれたのなら、私たちはとてもうれしいです。3日間という短い期間でしたが、素敵な時間をありがとうございました。

ASEAN混成(社会福祉)グループ合宿セミナーに参加して

池上　まゆみ
(公務員)

「国際化」という言葉は、私の耳にも馴染んで久しいのだが、旅行で接する外国の一面を除いて日常的には縁遠いものという感覚でいた。関心はあっても自ら実際に動きだすほど行動的にはなれないし、実際に国際的な活動している人のことを見聞きすると、羨望の眼差しでいたというのが正直なところである。今回ASEANグループとの合宿セミナーへの参加が引き金となって「私にとって国際化」を意識でき、考えるよい機会を得たことはとてもうれしく貴重な体験となった。

アメリカナイズという言葉がある。アジアに対する同様の言葉を私は知らない。聞いた覚えもない。「日本でないもの」をイメージする時、私のなかでは無意識のうちにアジア圏のことを排除していたのかもしれない。私の周りの多くも同じような感覚に思える。観光名所は別として、実のところASEANの国々の状況を私はほとんど知らない。小さい頃耳にした「発展途上国」「開発途上国」といった言葉のイメージに、私自身は何の実感もないのに左右されていたのかもしれない。

実際に交流の場で真っ先に感じたのは、私のような意識の低い者が、各国から選抜されて来た方たちに接していることの気恥ずかしさと申し訳なさだった。「カジュアルな集い」と事前研修で聞いてはいたものの、貴重な時間を共有するには失礼にあたらないのかと自問自答の繰り返しだったように思う。それでもASEANの方々に温かく迎え入れてもらい、合宿セミナーは私にとって楽しく実のあるものとなった。

収穫はたくさんあった。

その1：体験しないと分からないこと、気づかないことがたくさんあると実感。たいして大きくはないが自分の頭でっかちな生き方を反省。先入観は何より邪魔もの。

その2：理解し合う気持ちがあれば言葉は大きな壁にはならない。けれどもやっぱり、英語くらい話せたほうがよいと自覚。

その3：国際交流をしようと思ったら、何よりも自分の国のことについてもっと知っておく必要がある。合宿セミナーのディスカッションで、身近なことも曖昧なことを改めて認識。

その4：自分のものの見方をはっきりともつこと。それを、自分のスタイルできちんと表明できること。暗黙の了解は、国際化には通用しない。

交流を通じて接した方々の国を身近に感じられるようになったし、ほかにもまだまだ言葉にならない自分の内面の変化を感じている。よい意味で刺激となったし、こうして得た感覚を忘れないでもち続けていたいと思う。

ASEANの青年たちと環境問題を討論して

堀　琢磨
（公務員）

私たちのグループのディスカッションテーマは環境問題であった。本ディスカッションを通じて、ASEANと日本は、奇跡ともいわれる急速な成長を遂げる一方で、多くの環境問題が起こっていることが分かった。また、メンバーからさまざまな問題提起と解決方法の提案があった。ある人は、環境問題を解決するためには、長期的に見れば、教育こそ最も効果的な方法であると言った。また、ある人は、森林伐採後に植林を義務づけることが必要であると言った。経済成長の一方で顕在化する廃棄物問題に対し、ゴミを分別して出すことが重要であり、分別回収システム（たとえば、燃えるゴミ、燃えないゴミ、缶、びん、ペットボトル、古紙に分別し、再資源化）の構築やリサイクル技術の促進が重要だと言う人もいた。その他、森林伐採、ダイナマイトフィッシング等々、さまざまな事例について討論したが、すべての問題に相通ずることは、私たちは短期的視点ではなく、長期的視点で、「持続可能」という言葉を常に心がけたいという点である。

本プログラムを通じて、非常に有益であったことは、お互いの個人の意見を聞くことができたことにある。私たちの持っているお互いに対する情報を振り返ると、驚くほど多くをマスコミ等、第三者を通じて得たことに気づく、情報が国境を越えてお互いを知ろうとするには、その情報が正しいものか、他人を介し修正されているか判断する努力を常に怠ってはならない。そういう意味で、個人と個人で話し合い、お互いの真の姿を知り合えたことは非常に有益であった。また、討論を通じて、私たちには多くの共通する問題があることが分かった。今後、そういった問題は、各国の情報を共有化し合い、皆で考え、良いところは学び、悪いところは直していきたい。

以上のように、ディスカッションは大いに実りのあるものであったが、それにも増して最も大切なことは、本プログラムを通じてかけがえのない友達を得たことだ。スポーツ交流、交流の夕べ、合宿後にASEANの方々の提案で企画されたカラオケ大会！　フェアウェルパーティーでは別れ難く、次の日に見送りに行った。年末にASEANを訪問する予定だ。まるで、小学校以来の仲のよい同級生に会いに行く気分である。

熱意と誇りの人たち

立川　擁
（学生）

合宿セミナーの本当の価値は、分科会やパーティーにあるのではなく、お互いの世界観や夢を直接突き合わせることのできる時間にあると思う。通訳を介するのではなく、曖昧に済ませるのではなく、自分で相手を理解しようとする気持ちさえ持てば、厳密に言葉を解さなくても相手の思いはイメージとして心の中に伝わってくる。今回の合宿セミナーは、改めてそのことを実感させてくれるものだった。

アフリカの青年たちと話してみると、これから会社を作って頑張るつもりだという人や、大学で学んだことと現在の仕事が国の都合で一致せず不満に感じている人、新生国家の省庁の副委員長として国家建設に全力を傾けている人など、もちろんのことながら、アフリカはアフリカでもさまざまな境遇の人たちがいた。

しかし、母国を自らの手でよい方向へと導こうとする意欲に溢れ、日本を始めとする先進国政府のエゴの滲み出た行為に不満を感じている点では、

皆一緒だったように思う。戦争で負傷し、自国建設という同じ夢をもった友の死を目の当たりにした人もいるのだから、当然のことであろう。発展が始まったばかりのアフリカで彼らのなすことは非常に大きな価値と意味をもつからこそ、そうした意欲と不満が出てくるのだろうが、自分の存在価値に疑問を抱きがちな日本の人間、少なくとも私にとっては、彼らの力みなぎる姿は羨しくもあり、本来の生き方を思い出させる励みにもなった。

彼らが私から得たことよりも私が彼らから吸収させてもらったこと――熱意と誇りの大切さ――のほうが大きいような気がして、なんとも恥ずかしいけれど、いつかお返しのできる日がやってくれば、と思う。アフリカの皆さん、未来を信じてぜひ頑張っていってください。

アフリカの人たちとの出会い

桧垣　明弘
（公務員）

アフリカ青年とのふれあい。それはほんのわずかな時間かもしれないが、とても貴重なものだったと思う。日本人とは異なった感性、またアフリカ人同士でも国が違えば当然考え方も異なっている。同じ地球上に暮らしていても、生き方や環境が違えば考え方だってさまざまだ。〝違う〟ということの素晴らしさを改めて認識できたのはとてもよかったと思う。

アフリカの人たちは総じて理知的で穏やかな印象を受けた。特に、グループ討論の時は、理路整然と自国の現状、問題点を整理して話してくれるので、時折自分の不勉強が恥ずかしくなる時もあった。

その一方で、バレーボールの時はわれ先にとボールへ飛びついていくそのガッツとワンマンぶりに驚嘆することもあった。

また、宿泊所の大浴場に一緒に入った時の彼らのはにかみようは、横で見ていてとてもほほえましかった。

ただ、ちょっと残念だったのは、もっとフランス語が分かったらより彼らの考え方が理解できたのにとつくづく思う。

あっという間の合宿セミナーだったので、まだまだ話し足りないところもあったが、この続きは5年後にもう一度同じメンバーでどこかアフリカの国で再会して討論したいと思う。その時はできたらフランス語で話したいなと思う。このセミナーはあくまでもアフリカのことを知るよいきっかけ、プロローグに過ぎないのだ。きたるべき再会の時に備えて、これからもっと世界のこと、アフリカのことを勉強していきたい。そう思えただけでも自分にとって、この合宿セミナーはとても有

意義であった。

最後に、このセミナーをアレンジしてくれたスタッフの方々に感謝したいと思う。

合宿セミナーに参加して

小川　めぐみ
（公務員）

泊まりがけでの交流会は、たとえ子供でなくてもわくわくするものです。日本人とヴィエトナム人を同じ部屋で寝泊まりさせるという発想は、互いに慣れてもらう方法の一つとして有効であると思いました。

ただそれには条件があって、あまりにもコミュニケーションが困難ですと、お互いに話すことをあきらめてしまうようです。「言葉は通じなくても意思は通じる」ことを体感させるための企画でも、積極的にコミュニケートしようという参加者の努力が欠けては、せっかくの利点も生かされなくなってしまいます。

私自身はヴィエトナム語を多少なりとも学んでいる者として媒介に努めたつもりではありますが、日本人側の意識をもっと鼓舞しておく必要があるように感じました。というのは、ヴィエトナム人側にとっては、異国の地での長い日程のなかのほんの2泊3日であり、ただでさえ疲れているから

です。それでも私たち日本人側にとってはまたとない貴重な機会。惜しまずエネルギーを費やすべきなのは私たちだと思います。

分科会では、互いの社会の現状について、共通点、相違点、個人的見解等さまざまな意見が聞けて興味深かったのですが、もっと準備しておけばより充実した議論ができたような気がします。これについても上述と同様、日本人側のバイタリティーで進めていくのがよいと思いました。

懇親パーティーでは、互いの文化を紹介し合い、たいへん盛り上がりました。欲を言えば、共同作業的なプログラムで互いの親近感を強められたらよかったと思います。

合宿で得たものは、「ヴィエトナムによい友達ができた」ということです。近い将来、ヴィエトナムに行った時、必ず彼らと再会したいと思っています。

4.ホストファミリーの思い出

初めてのホストファミリー体験

日野　郁子
（山形県）

「今度の土曜、ホームステイの人を連れて来ていいか？」

職場からの電話で、主人に突然そう聞かれたのは、週の半ばのことでした。あらかじめ予定していたホストファミリーが、やむを得ぬ事情から都合がつかなくなってしまい、急きょ、わが家に白羽の矢(？)が立ったとのこと。事情は飲み込めたものの、頭の中は大混乱。

インドネシア！　イスラム教！　言葉はどうしよう？　食事は？

こうして私たちは、十分に準備をする間もなく、笑顔と度胸だけを頼りに、ニニさんを迎えることになったのでした。大学で英語を学んでいるというニニさんは、知的で、いかにも育ちの良いお嬢さんという感じの方でした。私たちの操るあやしげな英語にも誠実に応対してくださって、こちらは大助かり。5歳になる息子が、すぐになついてしまったのには驚きました。言葉など分からなくても、優しさはちゃんと伝わるのです。

もちろん、ちょっとした勘違いや失敗もありました。1日目から写真をたくさん撮ったつもりだったのですが、いざ現像に出そうとして、カメラにフィルムが入っていないことに気付いた時は、皆で大笑い。声を揃えて「オー、マイ、ゴッド！」でした。次の日、改めてすべて撮り直したことはいうまでもありません。

2日間という短い時間でしたが、ニニさんのおかげで、インドネシアという国がとても身近になりました。今、夫と私は、英会話を勉強しています。近い将来、ニニさんを訪ねたいと思っているからです。以前、私にとってインドネシアは、熱帯雨林と野生動物の国でした。でも、今は違います。ニニさんという友人のいる国になったのです。

マレイシアのお姉さん

西本　あや
（愛媛県）

6月23日、わが家に珍客到来。私たち家族にとって未知の国、マレイシアからのお客様はスザナさん。歌の上手な快活な女性でいつも私たちを楽

しませてくれ、また、マレイシアについての興味深い話もいろいろ聞かせてくれました。頼れるお姉さんができたようでうれしくなった私は、期末試験直前だったにもかかわらず、なるべく彼女と一緒に過ごそうとしたものです。

首都クアラルンプールの40階建てビルの中にあるという彼女のオフィスの写真を見せてもらいました。広々としたフロア、ずらりと並ぶコンピューター。それを操作するスザナさんのトゥドゥン(イスラム教女性のかぶり物)さえなければ、東京の先端企業のオフィス風景かと見間違いそうです。マレイシアの目ざましい経済発展ぶりが想像されます。あちらでも日本同様、産業の発展に伴い、農業従事者は減るし、家業を継ぐ若者も少なくなりつつあるようです。

彼女と一緒に音楽を聴いたり話をするうちに、今日本で話題になっている最新の映画や曲が、マレイシアでも同じように流行していることが分かりました。また、街には日本、中国、イタリア、フランスの料理店やマクドナルドの店が並び、皆いろいろな国の味を楽しんでもいるそうです。今や世界は地理的空間の障害を超え、文化が一つになりつつあるんだなと実感しました。

それぞれの国が、伝統文化という個性を保持しながらも、また他方で同じ文化を共有し、共感し合うことで、より親しくなっていけそうな気がしたスザナさんとの交流でした。

心配していた会話だったが

西田　登美子
(石川県)

金曜日の朝、私は一人でいそいそと彼女を迎えに行った。その日は主人や娘たちはそれぞれに出かけているので、私だけが乏しい会話力で彼女と向き合った。

今までにホームステイを数回受け入れたことはあったが、いつも家族と一緒に行動できる週末だったり夏休みだったから、会話面では娘に頼っていた。ところが今回は初日から、それも一日をどう過ごすかが、受け入れる前からの私の大きな課題だった。

会話の流れを事前に把握し、辞書と格闘しながら、どうにか暗記して、彼女と会う日を迎えた。ところが彼女は私の会話力を見抜いたのか、たどたどしいが心のこもった日本語であいさつしてきた。そのとたん、会話の流れはくずれ、次には単語とジェスチャーで会話が始まった。私はその時、今まで気負っていた自分がはずかしくなった。人との出会いには会話力なんかは二の次だということに、やっと気づいた。

その日の午前中は、お互い少しは家庭環境などを知りたいと思い、家で写真などを広げて会話した。もちろん、和英・英和辞典のお世話になりながらであるが。

午後は、自転車に乗るのが好きだとのことで、近くの〝木場潟(きばがた)公園〟を一周した。途中、川沿いの両側に何種類ものアジサイが美しく咲き誇っている所があり、毎年、観るのを楽しみにしていたが、今年は異国の彼女と観ることができ、不思議な気持ちにさせられた。

そうこうするうちに一日が終わった。心配していた会話だったが、娘に頼ることなくどうにか過ごせた喜びで、私の疲れはふっ飛んでいた。が、

彼女はどうだったろうか。

ホストファミリーとなって

松下　睦子
（愛知県）

7月7日から9日までの3日間、シンガポールのキャサリン・ミッチェルさんをわが家にお招きし、滞在していただきました。外国の方にホームステイしていただくのは初めてのことで、少し緊張しましたが、3日間無事に楽しく過ごすことができました。

私自身今までにイギリスとオーストラリアのホストファミリー宅でお世話になってきました。自分のまったく知らなかった生活様式や現地の習慣に触れられるのは、何ものにも代えられない貴重な経験でした。しかしながら外国で見知らぬ家族と暮らすということは、お互い容易なことではありません。

今回、シンガポールの青年が来訪されると聞き、今度は是非その方々を受け入れる立場になってみたいと思いました。それでキャサリンを受け入れることになったのです。

わが家は父が呉服店を経営していますので、最後の日は、今の季節には少し暑かったかもしれませんが、振り袖や打ち掛けなどを着て、お茶を点てたりお琴を奏でたりして過ごしました。特に振り袖は本人がとても気に入ってくれたのがうれしかったです。

また、母がいちばん心配していたのは食事のことでしたが、幸いキャサリンは日本料理が大好きで、食卓に並ぶものすべておいしいと言って食べてくれました。

ホストする立場になってみると、招いた方が、心から喜んでくれて無事に帰国されることがいちばんうれしいことだとよく分かります。何でもお

おらかに楽しんで体験してくれるキャサリンに来ていただいたことに本当に感謝しています。

笑顔は国境を超えて

岩城　蒐
（岩手県）

文化面や経済面で大きなショックと驚き、そして感動を与えてくれた私の経験したホームステイから30年過ぎた今、岩手県国際交流協会からの受け入れ呼びかけに、私は不安などまったくなく、ある種の期待と喜びさえ感じた。

歓迎会で民族衣装をまとった青年たちを目にした時、海外旅行をしているような錯覚さえ覚えた。生き生きと輝く目、社交的な会話と行動には世界に共通した若さと躍動があった。「こんばんは」という日本人よりも美しい発音でのあいさつが彼女の第一声。私は家族の紹介と家の中の案内を終え、バングラデシュの話や家族の話に花が咲いているうちに午前様になっていた。一緒に寝ましょうという語りかけに二晩とも布団を並べることになった妻は、よい思い出になったようである。

幼稚園、ダム、温泉、そして大規模農場を案内したが、幼稚園は非常に興味をもたれたようである。隣り近所の人々も親切に接してくれ、まさに地域ぐるみでの国際親善が達成できたのではない

かと思う。

3日目の朝、カレーを料理してくれた。わざわざ材料を持ってきてくださったことに心から喜びと感謝の気持ちでいっぱいである。

独立して日も浅く、日本からの多くの物心両面の協力が必要と訴える彼女の声は、一国民を超えた民族を代表するかのような印象さえ受け、挙国団結、国家指導者としての重責を担う一人として切実な願いを感ずるとともに、わが国の海外援助のあり方についての私の関心度合いをさらに高めたことは事実である。

日本、わが町にどのような印象をお持ちになられましたか？　貴女にいただいたサリー、写真等を見ながら、今なお楽しかった日々を思い出しています。わが身よりも祖国を愛するヤスミンさんに心から声援をお送りいたします。

いつの日か必ず再会できることを希望します。

出会えば姉妹となる

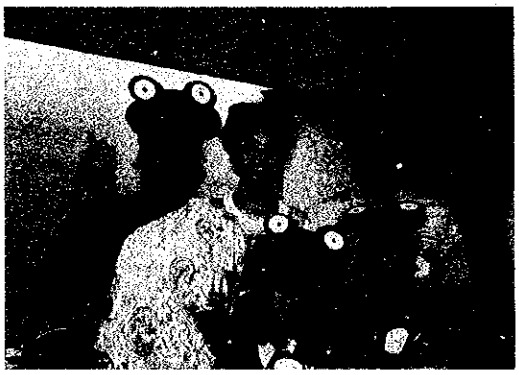
仲地　幸子
（沖縄県）

私はモルディヴのFathimath Shaziyyaさんのホストファミリーとなりました。私は現在一人で母親と住んでいますが、ホストファミリーとして彼女を受け入れるチャンスができたことを感謝いたします。私自身旅行が好きで、行く先々の国でお世話になることもありますので、その感謝の気持ちを少しでもお返しできる機会として、このボランティアに参加しました。

沖縄のことわざに〝イチャリバチョーデー〟という言葉があるように、私たちは、お互いに姉妹になる約束をいたしました。私も彼女も一人っ子で姉妹になれてとても喜んでいます。この3日間の出来事は、すべてビデオにとって良き思い出として、彼女にプレゼントしました。

3日間、私たちは国営海洋記念公園に行き、ムーンビーチで泊まりました。そこはモルディヴによく似ているそうです。彼女は幼稚園の先生ですが、仕事と家庭をうまくこなしているワーキングウーマンであり、見習うべきことがたくさんありました。モルディヴからたくさんの香辛料を持ってきてくれ、お料理を教えてくれました。私は洋裁にも興味があり、手縫いされた民族衣装にとても感心しました。

また、私の家から彼女の家へ国際電話をかけた時は、涙を流して娘さんと話していました。よほど娘さんのことが気がかりだったのでしょう。そして、ご主人とも話すことができました。2人とも英語がとても上手で、私自身もっと語学の勉強をせねばと思いました。この3日間で私は宗教や言葉、皮膚の色は違っていても、考えはすべて一つということを実感しました。とても短い期間でしたが、モルディヴ出身で、イスラム教徒の魅力的な女性と姉妹になり、今後も友情を発展させていきたいと思います。



インド青年のホームステイを終えて

大石順子
（愛知県）

わが家に泊まられたのは、南インドはカルナタカ州からみえた女性のギータ・ガウダさん。"歌"を意味するギータという名のとおり、歌が上手で、おしゃべり好きのとっても気さくな方でした。

わが家で英語が話せるのは、私だけ。夫も２人の子供も、言えるのはハローとサンキューだけですから、最初はずいぶん緊張していました。でも、陽気なギータさんにくすぐられたり、つつかれたりして子供たちはすっかりお友達になってしまい、日本語と英語の意味の通じない会話を、逆に楽しんでいるかのように、仲良く遊んでいました。

私が英語を教えている近所の子供たちも集まってきて、ギータさんが作ってくれたインドのご飯を「からーい」と叫びながら食べたり、みんなそろってビンディ（女性の額飾り）をつけて記念撮影したりと、あっという間の２泊３日で、本当に楽しく過ごせました。

今度は私たちがインドに行く番かな。

海の水はなぜ辛いのですか

林　由起子
（徳島県）

「海の水はなぜ辛いのですか」という質問に、「塩を含んでいるから」と間の抜けた返事をした私。でも「なるほど」とうなずいた彼。これが山の国ネパールと、海の国日本との違いでしょうか。DKさんを迎えた私たち家族にとって２泊３日の短い時間も、忘れられない思い出となりました。

私たち家族は10年前、ネパールを旅したことがあります。雄大なヒマラヤ山脈と、その間に点在する集落のなかで接した子供たちの純粋な瞳が忘れられず、今回の受け入れということになったような気がします。DKさんも私が持っているネパールの人の印象と変わりませんでした。

１歳半の子供と遊び、鳴門（なると）の渦を見て素直に驚き、うれしそうに砂浜を走り、海に飛び込んだ彼。じょうずに泳いだのには私たちのほうがびっくりしました。小さい時、ネパールの小さな川で泳いでいたそうです。「川よりも海のほうが泳ぎやすい」と、彼にとっては日本の思い出として焼きついたのではないでしょうか。時々、日本の若者をじっと見ては黙り込むということもありましたが、彼の目に日本の若者の姿はどのように映り、何を感じたのでしょうか。

夜遅くまで彼と話をして印象的だったのは、カーストについてでした。「教師として、子供たちにどのように教えているのか」との問いに、「カーストがあるという事実と、差別しないこと、お互いに尊敬し合うようにと教えている」とのことでした。また宗教上の戒律も、24歳の彼には形式ととらえている部分もありました。「若者には自由が必要です」と、笑顔で話したDKさんに、頼もしさを感じました。若者にとって国境はなくなりつつあるのだなと感じました。ネパールからの便りを楽しみにしたいと思っています。

心のきずな

大木　洋子
（山口県）

拙い英語力の私は、歓送迎会の席で、Aslamと言葉を交わすことはほんどできませんでた。夫も英語は少ししかできないと言っていますので、彼はとても不安だったのではないかと思います。わが家に連れて帰ればなんとか心で通じ合えるという思いはもっていましたが、彼の表情を見ていると気の毒な気持ちになりました。いよいよ彼を迎え、いつもどおりの夕食のつもりが、煮物の味付けも、焼き魚もまずいし、それをおいしいと言って食べてくれるAslamに申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

２日目はInam Ulのホストファミリー宅で多くの人たちと楽しい夕食をとることができ、ホームステイ最後の夜は、Inam Ulとそのファミリーをわが家に迎えてAslamが腕を奮いました。材料が十分揃わないにもかかわらず、彼が作ったカレーはとてもおいしいものでした。集った者が「おいしい、おいしい」を連発し、またたく間に鍋を空っぽにしてしまいました。食文化の違いを彼らから実際に学ばせてもらうことができ、より理解を

深め合うことができたのではないかと思います。

海から遠く離れたイスラマバードに住む彼を瀬戸内の美しい海に案内し、青い海原が広がる砂浜を散策したり、高台から瀬戸の風景を眺めたりしたものです。ドライブが好きだという彼を錦帯橋へも案内しました。彼はすべてに興味をもって問いかけ、自らもいろいろなことを話してくれました。私は思っていることが言葉で伝えられないもどかしさを感じましたが、心は通じ合えたと信じています。

滞在中、彼は私を実の母親のように慕ってくれました。子供のいない私が、知的で純真で思いやりあふれるこんな素晴らしい息子にめぐり合えるとは思ってもみませんでした。

いつか再びパキスタンに住むわが息子に会える日の来ることを楽しみにしています。

"It's A Miracle!"

田端　千裕
（北海道）

インド洋に浮かぶ、北海道を少し小さくした熱帯の島国から10人の青年教師がわが町にやってきた。市に滞在中、ホームステイしたのはわずかに２泊３日だったが、非常に素晴らしい思い出をつくることができた。私たちが受け入れたのはグル

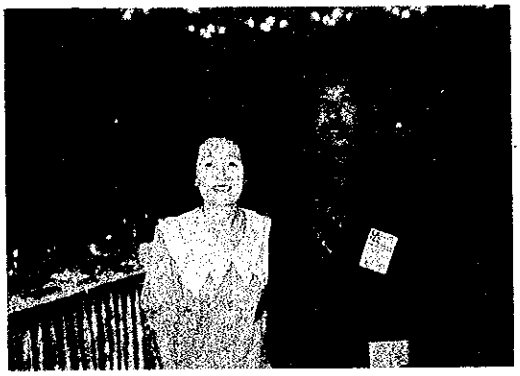
ープの団長を務めたアノマさんという活発で人なつっこい女性だった。母国に残してきた家族の写真を見せてもらいながら、いろいろな話をした。

基本的に日本の家でくつろいでもらうことを前提としたが、南国の人には珍しい、「雪の美術館」、北海道伝統の「ユーカラ織工芸館」等へ連れて行き、気候、文化の違いを確認し、また、織物等共通する部分も話し合った。夜は日本の生んだ国際的な文化〝カラオケ〟ボックスに行って歌い合った。彼女の国でもカラオケはポピュラーで、コンテストもあるそうだ。花火もしたが、日本と同じく子供たちに人気らしい。

食事に関しては、さしみはダメだが、天ぷら等の日本食は好きだと言って食べたが、夜も朝も非常に小食である。それで昼をピザにしたら一皿全部食べた。やはり典型的な日本食は口に合わなかったのだろう。最後の日の夜はとびっきり辛いカレーにしたらたいそう喜んで食べてくれた。

ホームステイ中に近所の高校が学園祭だったので連れて行った。学園祭のテーマは「72時間の奇跡」。私は遠い南の島から来たアノマと共有した3日間は奇跡のようだと思った。生まれも育ちも違う彼女が歓送会の時に私たちとはまるで前世からの知り合いのように感じて、初めて会ったのに懐かしい、と言ってくれた。妊娠後期の妻と母親としての話で盛り上がることもあった。

おみやげのセイロンティーを飲むたびに彼女を思い、スリ・ランカのことを思う。そしてこの奇跡のきっかけを作ってくれたJICAと滝川市に感謝しながら、芽生えた友情の絆を確かに感じるのである。



クリスさんを迎えて

上田　佳代子
(石川県)

彼がわが家に来るまで、ミクロネシア連邦という独立国を知らなかった。図書館に行って調べ、本を借りてきたことが、まず最初に彼を喜ばせた。チューク州の彼の住んでいる島モエン、彼の両親の住んでいる島、奥さんの出身の島の地図。チューク名物の土産ラブスティック(わが家への土産)を持って本に載っている写真の人は彼の知人だそうだ。「Oh！ No！」の連発で喜んだ。

チューク州では、彼の住んでいる島にしか電気がないこと、タワシ、灰皿等、日本人が統治時代に持ち込んだものがそのままチューク語になっていることも分かった。タロイモが主食と古い書物には書いてあったが、カリフォルニア米、日清のラーメン、キッコーマンの醤油、黄色のタクアンまで島にあり、日・米からの輸入品で現在の食生活は豊かなようであった。

敬老の日にちなんだテレビ番組を一緒に見、日本の核家族化による老人問題のことも話題になった。物質的に豊かな国かもしれないが、心の面では彼の国より貧しいと思った。彼の国の平均寿命は男約59歳、女約62歳だそうで、幼児死亡率も高い。医療設備の不備、医者不足（現在島にいる医

者はフィリピン人）が原因。もし日本が彼らの国に援助してあげられるとしたら、医療設備の充実と医者や看護婦の育成だと思った。

２日目、何をしたいか聞いたが、「金沢のことを知らないのでおまかせする」との返事だった。東京研修中、これからの地方プログラムで訪れる場所の勉強をたとえ１時間でもしてきたら、希望を言ってもらえてホストファミリーも楽だったと思う。

彼が唯一希望したことは、目が時々見えないので視力検査をし、もしできるなら日本で眼鏡を買いたいということだった。視力検査をした結果、クリスさんは35歳なのに目がよすぎて、すでに老眼が始まっていることが分かった。ちょうど敬老の日の週で、老眼鏡セールをしていて安かったので、わが家からのプレゼントにした。彼はとても喜んでくれた。帰国後眼鏡をかけるたびに私たちのことを思い出してくれることだろう。

さよならパーティーでの彼の歌や踊りはたいへん素晴らしかった。わが家はミクロネシアのことは分かったが、せっかく一緒に来た西サモア、ヴァヌアツ、トンガ、マーシャル諸島等の紹介を、それぞれのホストファミリーからしてほしかった。

初めてホストファミリーを体験して

岡本　くみこ
（岡山県）

今回、初めてのホストファミリーの体験です。ホストファミリーについて人から聞き〝とても楽しそうだな〟というのが、きっかけです。実際、どんどん現実化する過程で〝楽しみ〟というものは薄れていき、〝不安〟が広がってきます。どのような人が来るのだろう、こんな家でいやな思いをせずに過ごしてもらえるだろうか、外国の方とほとんど接したことのない両親はどのような対応をするだろうなど、未知の体験に向けてあらゆる不安要素が頭の中に浮かんできます。両親も、楽しみ半分、不安半分といったところです。ホームステイ中の計画は、少しは英語を話せるからだいじょうぶ、と自分に言い聞かせながらです。とにかく、いろいろ考えておいてホームステイが始まってから希望を聞きながら行動しようということにします。実際、対面式でノールに会った時、私の中の不安はほとんど消え、とても安堵しました。

ホームステイは、２泊３日です。まず、家に帰り両親と対面です。母は、彼女が私の従兄弟や叔母に似ていると大騒ぎでした。これで、心配の一つだった両親の対応も解消されます。家の中を案内し、お風呂、シャワー、トイレの使い方を説明します。研修のスケジュールはハードで、少し疲れているようです。夕食をとり、友人宅でのホームパーティーに一緒に参加します。早めに引き揚げようと思っていましたが、とても楽しく12時頃帰宅することになります。

２日目はあいにくの大雨です。あまり遠出はしたくないということなので、近くにある昔の回船問屋（観光できるところ）に行きました。話をしていると、日本的なものにとても興味があるようです。そこで、急きょ近所に住む祖母を呼びだし、着物を着ることにしました。これは、たいへんな喜びようでした。そして、私はブルネイの民族衣装を着ることになりました。そのうち、雨もあがりそのまま出かけました。私の家族は、着慣れないので疲れるのではと心配をしていましたが、結局５時間ほど着ていました。大雨が幸いしてとても充実した一日になったように思います。

いよいよ最終日、家の中で話をしたり、買い物に行ったりで終わってしまいました。２泊３日という短い間でしたが、お互いに別れを惜しみ、帰ってしまうのを寂しく思いました。

ブルネイの方に対して持った印象は、とても家族を大切にすること、宗教に忠実であること、お

おらかであることなどです。たとえば、出かけている時、食事の準備をしている時なども私の両親のことを気遣い、気にしていなかった私は反省させられました。宗教的なことで理解に苦しむ面もありますが、お互いに理解しようという姿勢は大切だと思います。

ホストファミリーの体験は、来られた方に対して感じるのと同時に、自分自身や日本人についても考えるよい機会だったと思います。海外に旅行をして異国の習慣を楽しむのとは異なり、自分の国に外国の方を招くことによって冷静に考えることができます。

このような機会を与えてくださった方々に感謝し、より多くの方がこのような体験をされることを心から望みます。

楽しい思い出をありがとう

深沢　公子
（山梨県）

海外の青年を受け入れるというホームステイの経験を初めて体験し、私たち自身多くのことを学んだと深く感謝している。

特に今回は望月会長の呼びかけで県内で働く看護協会会員が中心となって受け入れただけに、いずれも初めての経験にとまどいながらも精いっぱい心からのもてなしをさせていただいた。わが家の青年はフィリピンのジェラさん、とても明るい素直な女性で、すぐにうちとけ、娘が急に一人増えたような賑やかな楽しい3日間だった。プログラムも忙しい仕事のなかでは思うように準備できず、歯科医師ということでなんとか主治医を通して歯科医療関係の見学なども予定したが、むしろありのままの日常生活そのものの中に組み込ませていただいたと言えるだろう。

つまり、月1回の日本舞踊のけいこにつき合わせたり、毎年恒例の〝甲府大好きまつり〟で、一緒に浴衣がけで踊らせたり、日曜のミサに同行させたり、思えば忙しいスケジュールであったのかもしれないと反省している。

しかし、日本の浴衣を着た彼女はとてもかわいらしく、踊りも1時間くらいの特訓で2曲ともマスターし、1500人の踊り手の一員としてすっかりとけこんでいた。ただ一つ愉快だったのは、25.5サイズの白足袋は用意できたものの、合うぞうりがなく、仕方なくスニーカーのままで踊ったのもいい思い出となった。

彼女との3日間を振り返り、今思うことは、国が違っても同じ地球の上に住む人という身近な存在であり、とても温かいものが心に残っていることである。友情の絆というより生活を共にした家族としての思いがいつまでも消えない。これからも折にふれわが家の一員としての彼女のことを思い続けていくことだろう。幸せなひとときをありがとう。

ハウアさんに出会えて

福島　知津枝
（岡山県）

わが家に来てくださったハウアさんは遠くニジェールからのお客様でした。彼女は私とほぼ同年齢でしたので、子供のこと、教育のこと、生活様式のこと等、たくさん話すことができした。

私はハウアさんに、ニジェールにはないというジャンケンを教えてあげました。すっかり「ジャンケン」をマスターした彼女は、私にこう言いました。「私は今職場でチーフをしているので、何かを決めなくちゃならない時がよくあるの。その時、ジャンケンを使おうと思うわ」と。私が「ジャンケンは便利だけど大事な仕事での問題を決める時には使わないほうがいいと思う」と言うと、ハウ

アさんは人なつっこい笑顔でけらけらと笑ってくれました。

ハウアさんは、11人兄弟で、実家ではお父さんが、農業を一生懸命やっているそうです。砂漠が国土の7割を占めるニジェールでは、農作物を育てることは大変なことで、私の母が庭に干していた小豆を手に取り、「きれいな豆だ」としきりに言っていました。「お父さんのお土産に」と渡した小豆を大事そうにかばんにしまいながら、「この豆が来年実って、またその次の年も次の年もと続いていったらどんなにうれしいことか」と話していたハウアさん。食べ物も、着る物も何もかもが満たされた日本に暮らしている私たちには、なんだか恥ずかしくなるような言葉でした。

ハウアさんが来てくださって、私たちは、ゆったりと楽しい3日間を過ごすことができたと同時に、忘れかけていた大切な何かを思い出させてもらったような気がしています。「ニジェールにぜひ来てください」と言ってくださったハウアさん。またお会いできる日までお元気で。

ぼくの家にヴィエトナムからランさんがきた

平田　学(小3)
(苫小牧市)

ぼくの家にきた、ヴィエトナム人は、ランさんです。

11月3日は、ランさんが、きた日です。ランさんの、くつろぐへやは、ぼくのへやです。

それで、くるまえにまどをふいたり、かがみをふいたりして、自分のへやをぴっかぴっかにしました。

それで、いよいよむかえにいくじかんになりました。

くるまにのっているとき、「こんにちは」は、どんなことばかなーと本を見ました。見ると、女の人には「チャオチー」で、男の人には「チァオアイン」でした。

男の人に言うときと、女の人に、言うときが、ちがうなんてしんじられませんでした。それで、かかりの人が「ラン」とよんだら、ランさんがきました。

それでぼくは「チャオチー」といいました。

なんとかつうじました。

そして本を見て、わたしのなまえを見ました。すると「トイテンラー」でした。だから「トイテンラー学平田(マナブヒラク)」といいました。そしてぼくのお父さんのくるまにのってかえりました。

ヴィエトナム語は、あまりにもむずかしいので、えいごではなしました。

ランさんはとってもきれいな人でした。ランさんはとってもやさしかったです。

THE YOUTH FRIENDSHIP PROGRAMME

FOREWORD

"The Youth Friendship Programme" is implemented by Japan International Cooperation Agency (JICA) as part of a technical cooperation scheme for developing countries. Under the programme young people from the ASEAN and other Asian, Pacific and African countries, who will shoulder the task of future nation-building, are invited to Japan for one month in different groups categorized by their specialized fields. The purpose of this programme is to provide the participants with opportunities to study their respective fields, as well as to deepen mutual understanding, thereby establishing trust and friendship between them and the Japanese people through wide-ranging exchanges with their host families and their counterparts.

During the past eleven years from 1984, a total of 11,921 young people from the abovementioned nations have visited Japan. At first only six ASEAN participated. Our network of friendship, however, has greatly extended to Pacific countries and territories, Myanmar, China, Korea, South Asian countries, Mongolia, African countries, three Indo-Chinese countries: Cambodia, Laos, and Viet Nam.

In 1995, to mark the twelfth year of this programme we invited a total of 1,533 youths and fulfilled our role as their host, thanks to the warm support and cooperation of all those concerned. I wish to express to them my deepest appreciation.

This is a brief account of the one-month exchange programmes, along with the essays contributed by some of the participants from our guest countries, by the Japanese youths who took part in the In-house Seminars, as well as by the host families in the various parts of Japan who offered to receive the participants in their homes. It is out greatest hope and delight that this account would help to further enhance this programme and help our participants bring back their good memories.

This report will be sent to all the participants of the year 1995 as well as to those who are concerned with the programme in the participating countries.

Lastly, I wish to convey my deep and sincere gratitude to all those who have helped us implement this programme and who have sent us heartful essays and opinions. I hope we can count on your continued support and cooperation towards making the Youth Friendship Programme even more worthwhile in the years to come.

Thank you.

March 1996

Hiroyoshi IHARA
Managing Director, Training Affairs Department
Japan International Cooperation Agency

CONTENTS

Foreword
1. The Youth Friendship Programme—Asia, Pacific and Africa
   1. Outline of the Programme ····· 105
   2. List of Invited Groups and Implementing Youth Organizations in 1995 ····· 110
   3. Participating Countries and Number of Youth (1984-95) ····· 113
2. Impressions by the Participants

Asia
- Brunei ····· 117
- Indonesia ····· 119
- Malaysia ····· 123
- Philippines ····· 129
- Singapore ····· 136
- Thailand ····· 143
- Bangladesh ····· 150
- Bhutan ····· 150
- India ····· 151
- Maldives ····· 152
- Nepal ····· 153
- Pakistan ····· 155
- Sri Lanka ····· 156
- Mongolia ····· 157
- Myanmar ····· 158
- Cambodia ····· 159
- Laos ····· 160
- Viet Nam ····· 161

Pacific
- Fiji ····· 165
- Papua New Guinea ····· 167
- Solomon Islands ····· 169
- Western Samoa ····· 170

Africa
- Morocco ····· 171
- Swaziland ····· 173
- Togo ····· 174
- Uganda ····· 175

3. Impressions by Japanese Counterparts ····· 177
4. Impressions by Host Families ····· 189

Addresses
   1. Related Organizations in Japan ····· 202
   2. Alumni Associations ····· 204
   3. JICA Offices Concerned with this Programme ····· 205

Profiles of Participants

1. The Youth Friendship Programme

Asia, Pacific and Africa

1. Outline of the Programme

(1) Purpose

The Purpose of the Youth Friendship Programme is to invite young people from Asia, Pacific and Africa who will shoulder the task of future nation building. These youths are given opportunities to discuss future relations between Japan and the respective countries with their Japanese counterparts. Through such close personal contacts, ever-lasting relationship based upon mutual understanding and true friendship will be established and fostered.

(2) Group Categories

① ASEAN Countries:

a. Single Country Group

Economy (Malaysia – Economic & Financial Management, Small & Medium Industry & Manufacturing)

Education

Social Development

Agriculture (Malaysia — Agriculture Development)

b. Component Group

Environment

Education

Social Welfare

Health & Medical Service

Public Administration

Economy

Press

② Pacific Countries and Territories, South Asian Countries, Mongolia:

Working Youth

Student

Teacher

Youth Leader

Civil Servant (Government Official)

③ African Countries:
Teacher (High School or Junior High school)
Civil Servant (Economic Development)

④ Myanmar, Cambodia, Laos:
Education

⑤ Viet Nam:
Government Official
Economy
Education and Related Areas
Agriculture

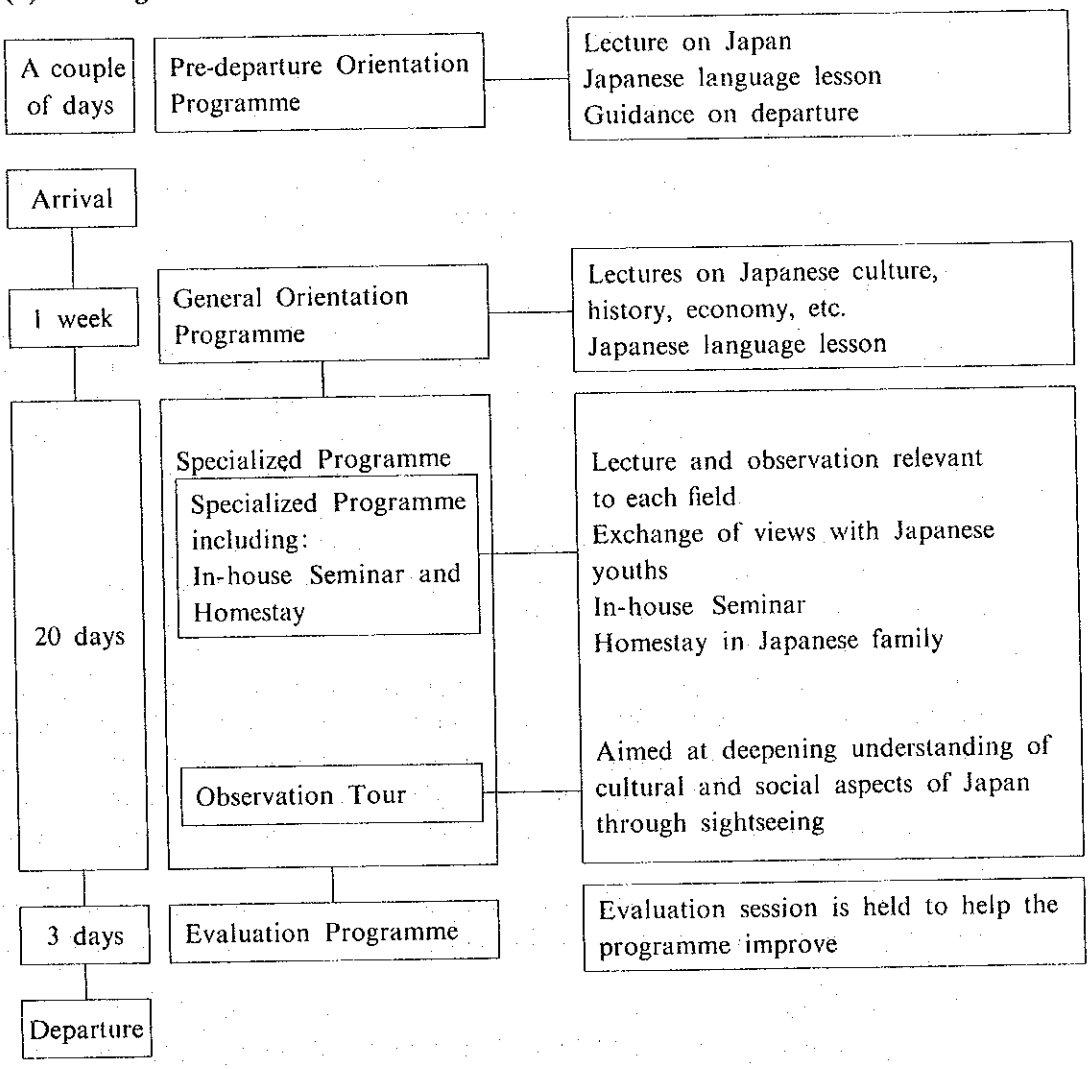
(3) Duration and Number of Participants

150 young people from each ASEAN-member country (50 from Brunei), 20 from Myanmar, 80 from 14 Pacific countries and territories, 100 from 7 South Asian countries, 10 from Mongolia, 100 from 44 African countries and an UN organization, 100 from Viet Nam, 30 from Cambodia and 20 from Laos will be invited to Japan for a month from May 1995 to February 1996. 1,260 youths will be invited in all.

(4) Pre-departure Programme and One-month Programme in Japan

① Pre-departure Orientation Programme in the respective countries
② General Orientation in Tokyo
③ Specialized Programme (including In-house Seminar and Homestay)
④ Observation Tour to Hiroshima & Kyoto, etc.
⑤ Evaluation and Preparation for departure

(5) A Programme Model



(6) Aftercare Project

In order to promote the understanding of Japan by the youths who were invited under the Youth Friendship Programme and also to perpetuate the friendship between them and Japanese youth, JICA has been conducting an aftercare project as follows.

① Supplementary Literature

JICA supplies the participating youth, after their return, with the "Exchange Report" which is a digest of the programme of the year and the news letter "Dear Friends", so that they can keep up their understanding of Japan.

② Alumni Associations

JICA promotes the organization of alumni associations which consist of ex-participants of this friendship programme in each of the participating countries respectively. Alumni associations take the initiative in making it's members' list, cooperating in Pre-departure Programmes for new participants, holding meetings and issuing bulletins for their membership. JICA offers support to alumni associations by bearing costs of their activities, etc.

Alumni associations have already been organized in all 6 ASEAN countries. Also in the Pacific Countries and Territories, preparation is being done for organizing an alumni association.

③ Alumni Liaison Conference

Representatives of alumni associations in respective countries meet together to hold an alumni liaison coference for the purpose of promoting activities of each alumni associations and ensuring continuous development of this Youth Invitation Programme.

JICA gives financial support to the alumni liaison conference by bearing various expenses. JICA also sends a Japanese delegation to the alumni liaison conference to the exchange of views.

Up to the present, the alumni liaison conference is held in countries of ASEAN in which an alumni association has already been organized. It was held in the Philippine in 1995.

④ Follow-up Mission

To the participating countries, JICA sends missions which consists of Japanese youths who played a major role in receiving participants in Japan, to ensure further understanding of Japan among the ex-participants. At the same time, Japanese delegations deepen their understanding of the actual conditions of those countries, which will contribute to the improvement of the programme.

Follow-up missions expand and develop this friendship programme, which used to be rather unilateral, into an "exchange" programme in it's true sense which enhances mutual trust and friendship between the youths of Japan and the participating counties.

In 1995, 5 teams whith 24 members visited the ASEAN countries.

2. List of Invited Groups and Implementing Youth Organizations

Period	Country	Group	Size (Persons)	Youth Organization
May 10-June 8	Indonesia	Education	22	Japan Overseas Cooperative Association
	Indonesia	Social Development	25	The Working Youth Welfare Association
	Philippines	Education	22	National Assembly for Youth Development
	Philippines	Social Development	25	Junior Executive Council of Japan
May 24-June 22	Singapore	Education	22	International Hospitality and Conference Service Association
	Singapore	Social Development	25	Yuai Youth Association
	Thailand	Education	22	The World Youth Visit Exchange Association
	Thailand	Social Development	25	Japan Youth Hostels Inc.
June 7-July 6	Malaysia	Economic and Financial Management	25	The World Youth Visit Exchange Association
	Malaysia	Small & Medium Industry & Manufacturing	25	Japan Overseas Cooperative Association
	Philippines	Economy A	20	Development Association for Youth
	Philippines	Economy B	24	Japan International Cooperation Center
June 21-July 20	Indonesia	Economy A	20	International Hospitality and Conference Service Association
	Indonesia	Economy B	24	The Working Youth Welfare Association
	Singapore	Economy A1	20	Japan Association of the Experiment in International Living
	Singapore	Economy A2	24	Japan Youth Hostels Inc.
	Singapore	Economy B	22	Junior Executive Council of Japan
June 28-July 27	Bangladesh	Government Official (Social Welfare)	20	Japan Overseas Cooperative Association
	Bhutan & Maldives	Teacher	10	Development Association for Youth
	India	Youth Leader (Social Development)	23	Japan International Cooperation Center
	Nepal	Teacher	10	Japan Seinendan Council
	Pakistan	Civil Servant (Agriculture)	20	The World Youth Visit Exchange Association
	Sri Lanka	Teacher	10	National Assembly for Youth Development
July 5-Aug. 3	Korea	Youth Activity Leader and Related Civil Servant	25	International Hospitality and Conference Service Association
	Korea	Working Youth (Technical Field)	23	The Working Youth Welfare Association
	Korea	Teacher (Nurse teacher)	25	Japan Youth Hostels Inc.
	Korea	Student (Natural science course excluding agriculture, foresty & fishery courses)	25	The World Youth Visit Exchange Association
Aug. 23-Sept. 21	Philippines	Agriculture	25	The Rural Youth Education Development Association
	Thailand	Agriculture	25	Japan Seinendan Council
	Thailand	Economy A	20	Junior Executive Council of Japan
	Thailand	Economy B	24	The Working Youth Welfare Association
Aug. 30-Sept. 28	Pacific Component	Civil Servant	22	Japan Overseas Cooperative Association
	Pacific Component	Teacher	14	Japan Youth Hostels Inc.
	Papua New Guinea	Civil Servant	10	The World Youth Visit Exchange Association
	Papua New Guinea	Teacher	20	Japan International Cooperation Center
	Fiji	Civil Servant	12	National Assembly for Youth Development
Sept. 13-Oct. 12	Indonesia	Agriculture	25	The Rural Youth Education Development Association
	Malaysia	Agriculture Development	16	Japan Overseas Cooperative Association
	Malaysia	Education	25	Development Association for Youth
	Malaysia	Scientific and Technological Development	25	Toyokawa International Association
	Brunei	Social Development	14	Japanese Association of the Experiment in International Living
Sept. 27-Oct. 26	ASEAN Component	Environmental Protection	30	Junior Executive Council of Japan
	ASEAN Component	Social Welfare	30	The World Youth Visit Exchange Association
	ASEAN Component	Health and Medical Service	30	International Nursing Foundation of Japan
	ASEAN Component	Press	23	Japan International Cooperation Center
Oct. 11-Nov. 9	African Component			
	English Speaking Countries: Teacher 1		22	Osaka Foundation of International Exchange
	French Speaking Countries: Teacher 2		25	Osaka Foundation of International Exchange
	English Speaking Countries: Civil Servant 1		24	International Hospitality and Conference Service Association
	French Speaking Countries: Civil Servant 2		12	Japan Overseas Cooperative Association
	French Speaking Countries: Civil Servant 3		14	The World Youth Visit Exchange Association
Oct. 18-Nov. 16	Viet Nam	Government Official	25	Japan International Cooperation Center
	Viet Nam	Economy	25	The Working Youth Welfare Association
	Viet Nam	Agriculture	24	The Rural Youth Education Development Association
	Viet Nam	Education and Related Areas	24	Development Association for Youth
Oct. 25-Nov. 23	ASEAN Component	Education 1	18	Japanese Association of the Experiment in International Living
	ASEAN Component	Education 2	18	Yuai Youth Association
	ASEAN Component	Economy 1	17	Japan International Cooperation Center
	ASEAN Component	Economy 2	17	Japan Youth Hostels Inc.
	ASEAN Component	Economy 3	18	National Assembly for Youth Development
Nov. 8-Dec. 7	China	Youth Leader	25	Japan Seinendan Council
	China	Working Youth	25	Junior Executive Council of Japan
	China	Civil Servant	23	International Hospitality and Conference
	China	Teacher	25	National Federation of UNESCO Association in Japan
Nov. 15-Dec. 14	China	Infrastructure	25	Japan Youth Hostels Inc.
	China	Economic Development	24	The Working Youth Welfare Association
	China	Local Development	25	The World Youth Visit Exchange Association
	China	Human Resources Development	25	National Assembly for Youth Development
Jan. 17-Feb. 15	Cambodia	Education	30	National Assembly for Youth Development
	Laos	Education	20	International Hospitality and Conference Service Association
	Myanmar	Education	20	The World Youth Visit Exchange Association
	Mongolia	Civil Servant	10	Japan Overseas Cooperative Association
Total	71 groups 1,533 Youth	6 ASEAN Countries (792), 13 Pacific Countries and Territories (78), Myanmar (20), China (197), Korea (98), 7 South Asian Countries (93), Mongolia (10), 41 African Countries and one International Organization (97), Cambodia (30), Laos (20), Viet Nam (98) **Grand Total: 74 Countries and Territories plus one International Organization**		

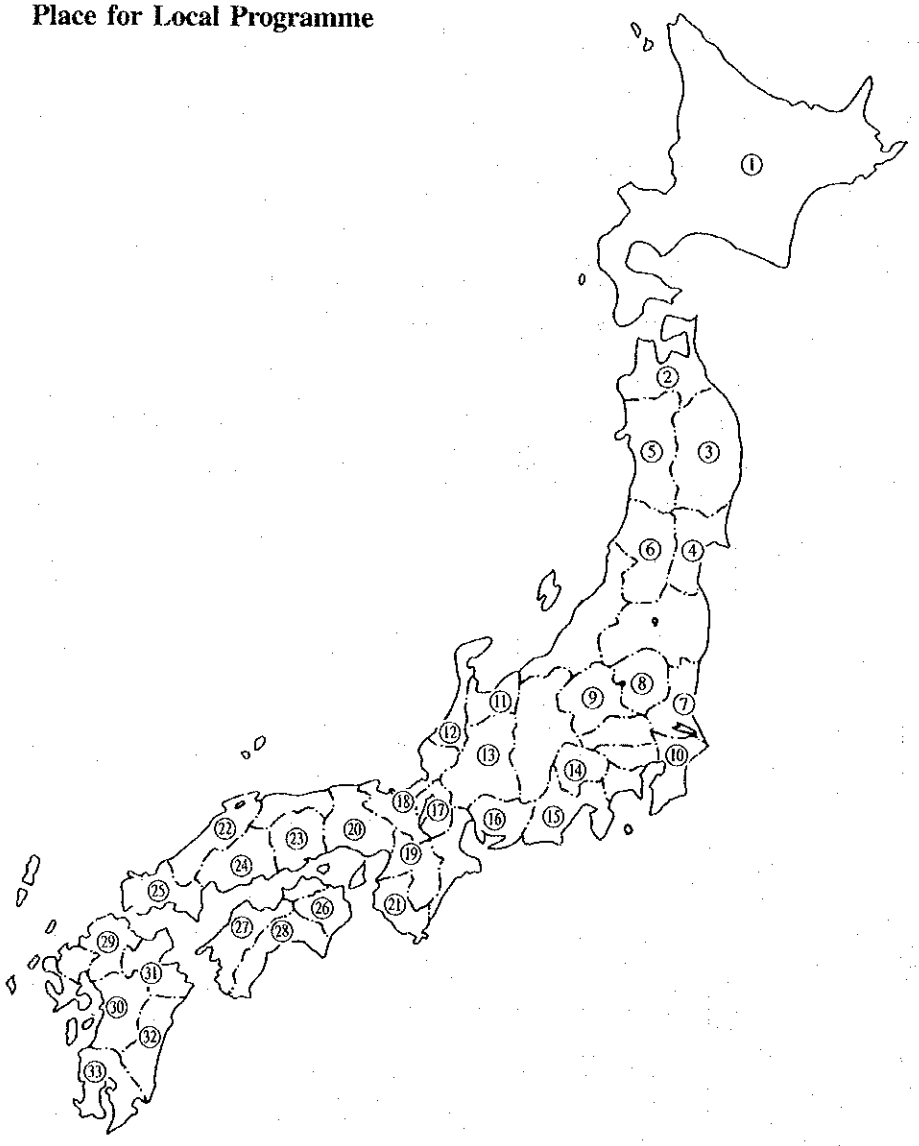
in 1995

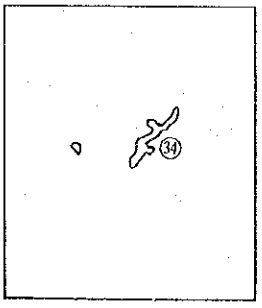
Place for Local Programme	Local Youth Organization
Yamagata Tokushima Yamanashi Hiroshima	Yamagata Overseas Cooperative Association Tokushima Youth Federation Yamanashi Prefectural Assembly for Youth Development Hiroshima International Relations Organization
Ibaraki Osaka Shizuoka Kyoto	The World Youth Communication Club of Ibaraki Yuai Youth Association Osaka Branch Numazu Association for International Communications & Exchanges Kyoto Youth Hostels Association
Tokushima Ehime Hiroshima Ishikawa	Tokushima Pref. Youth Overseas Exchange Association Ehime Overseas Cooperative Association Shobara City International Exchange Executive Committee Komatsu International Association
Shimane Gunma Miyagi Fukuoka Aichi	The International Youth Exchange Organization of Shimane Prefecture Tatebayashi Executive Committee for ASEAN Youth Invitation Program Miyagi International Association Fukuoka Youth Hostels Association Toyohashi International Association
Iwate Okinawa Aichi Tokushima Yamaguchi Hokkaido	Iwate International Association Okinawa International Foundation Aichi International Association Tokushima International Association Tokuyama Federation of World Youth Takikawa International Exchange Association
Niigata Saitama Fukui Akita	Niigata International Association Ageo International Promotion Committee Fukui International Association Akita Federation of World Youth
Oita Aomori Akita Aichi	International Affairs Division, Planning Department, Oita Prefecture Aomori Overseas Cooperative Association Akita International Association Japan Young Circle
Gifu Ishikawa Toyama Shiga Wakayama	Hida Takayama International Association Ishikawa Youth Hostels Association Toyama Federation of World Youth Shiga Prefecture Youth Union Organization Wakayama Prefecture Youth Guidance Association
Kagoshima Tochigi Miyazaki Aichi Okayama	Kagoshima International Association Tochigi Youth Invitation Program Executive Committee Development Association for Youth Miyazaki Branch Toyokawa International Association Japanese Association of the Experiment in International Living Okayama Committee
Hokkaido Toyama Yamanashi Tokushima	Kushiro City Foreign Youth Invitation Committee The Toyama International Center Foundation International Nursing Foundation of Japan Tokushima Newspaper & Broadcasting Committee
Osaka Osaka Yamaguchi Okayama Okayama	Osaka Foundation of International Exchange Osaka Foundation of International Exchange The Youth Organization Council of Yamaguchi Tsuyama and Asia Friendship Society Okayama Federation of World Youth
Hokkaido Osaka Tokushima Ishikawa	Tomakomai International Exchange Center Pacific Resource Exchange Center Tokushima-ken Kokusai Nogyo Kyogi-kai Ishikawa Foundation for International Exchange
Hokkaido Kumamoto Chiba Shizuoka Fukuoka	Sapporo International Communication Plaza Foundation Kumamoto Overseas Cooperative Association Chiba Prefectural International Association Shizuoka Association for International Relations Kyushu-Yamaguchi Economic Federation
Okayama Mie Nagasaki Fukushima	Okayama-ken Seinenkan Mie Prefecture Seinendan Council Nagasaki International Association Fukushima UNESCO Association
Tottori Ehime Kagawa Okinawa	Tottori Youth Friendship Association Ehime Prefectural International Association Friendship Association for Youth Dispatched Overseas in Kagawa Okinawa Prefectural Assembly for Youth Development
Osaka Kochi Hyogo Hokkaido	Osaka Youth International Exchange Federation Kochi International Association Hyogo Youth Services Administration Hokkaido Cooperative Association Doto Branch

3. Participating Countries and Number of Youth (1984-95)

Year / Country	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	Total
Indonesia	149	150	150	150	150	149	150	149	147	149	145	150	1,788
Malaysia	147	148	150	150	150	150	150	150	150	150	150	149	1,794
Philippines	149	150	150	150	150	150	149	147	148	149	150	149	1,791
Singapore	149	150	150	150	150	150	150	147	149	149	147	146	1,787
Thailand	149	150	150	150	150	150	150	150	149	147	150	150	1,795
Brunei	5	30	49	50	50	49	50	43	50	48	49	48	521
Total (ASEAN Countries)	748	778	799	800	800	798	799	786	793	792	791	792	9,476
Mongolia	—	—	—	—	—	—	—	—	10	10	10	10	40
Myanmar	—	—	10	10	0	0	0	0	0	0	20	20	60
India	—	—	—	—	—	—	—	30	29	30	13	23	125
Bangladesh	—	—	—	—	—	—	—	20	20	20	20	20	100
Pakistan	—	—	—	—	—	—	—	20	20	20	20	20	100
Nepal	—	—	—	—	—	—	—	10	9	10	10	10	49
Bhutan	—	—	—	—	—	—	—	5	5	5	5	5	25
Sri Lanka	—	—	—	—	—	—	—	10	10	10	10	10	50
Maldives	—	—	—	—	—	—	—	5	5	5	5	5	25
Total (South Asian Countries)	—	—	—	—	—	—	—	100	98	100	83	93	474
African Countries	—	—	—	—	—	—	—	—	—	50	100	97	247
Fiji	—	—	10	10	11	12	12	12	12	12	12	12	115
Papua New Guinea	—	—	10	14	30	34	30	30	30	30	30	30	268
Other Pacific Countries and Territories	—	—	—	—	45	38	36	32	36	34	38	36	295
Total (Pacific Countries and Territories)	—	—	20	24	86	84	78	74	78	76	80	78	678
Viet Nam	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	98	98
Cambodia	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	30	30
Laos	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	20	20
Total (Indochina Countries)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	148	148
Total	748	778	829	834	886	882	877	960	979	1,028	1,084	1,238	11,123

Place for Local Programme





① Hokkaido; Sri Lanka, Teacher
ASEAN Component, Environmental Protection
Viet Nam, Government Official
ASEAN Component, Education 1
Mongolia, Civil Servant
② Aomori; Thailand, Agriculture
③ Iwate; Bangladesh, Government Official
④ Miyagi; Singapore, Economy A1
⑤ Akita; Thailand, Economy A
⑥ Yamagata; Indonesia, Education
⑦ Ibaraki; Singapore, Education
⑧ Tochigi; Malaysia, Agriculture Development
⑨ Gunma; Indonesia, Economy B
⑩ Chiba; ASEAN Component, Economy 1
⑪ Toyama; Papua New Guinea, Civil Servant
ASEAN Component, Social Welfare
⑫ Ishikawa; Philippines, Economy B
Pacific Component, Teacher
Viet Nam, Education and Related Areas
⑬ Gifu; Pacific Component, Civil Servant
⑭ Yamanashi; Philippines, Education
ASEAN Component, Health and Medical Service
⑮ Shizuoka; Thailand, Education
ASEAN Component, Economy 2
⑯ Aichi; Singapore, Economy B
India, Youth Leader (Social Development)
Thailand, Economy B
Malaysia, Scientific and Technological Development
⑰ Shiga; Papua New Guinea, Teacher
⑱ Kyoto; Thailand, Social Development
⑲ Osaka; Singapore, Social Development
African Component (English Speaking Countries) Teacher 1
African Component (French Speaking Countries) Teacher 2
Viet Nam, Economy
Cambodia, Education
⑳ Hyogo; Myanmar, Education
㉑ Wakayama; Fiji, Civil Servant
㉒ Shimane; Indonesia, Economy A
㉓ Okayama; Brunei, Social Development
African Component (French Speaking Countries),
Civil Servant 2 (Economic Development)
Civil Servant 3 (Economic Development)
㉔ Hiroshima; Philippines, Social Development
Philippines, Economy A
㉕ Yamaguchi; Pakistan, Civil Servant
(Preferably related to agriculture sector)
African Component (English Speaking Countries),
Civil Servant 1 (Economic Development)
㉖ Tokushima; Indonesia, Social Development
Malaysia, Economic and Financial Management
Nepal, Teacher
ASEAN Component, Press
Viet Nam, Agriculture
㉗ Ehime; Malaysia, Small and Medium Industry and Manufacturing
㉘ Kochi; Laos, Education
㉙ Fukuoka; Singapore, Economy A2
ASEAN Component, Economy 3
㉚ Kumamoto; ASEAN Component, Education 2
㉛ Oita; Philippines, Agriculture
㉜ Miyazaki; Malaysia, Education
㉝ Kagoshima; Indonesia, Agriculture
㉞ Okinawa; Bhutan and Maldives, Teacher

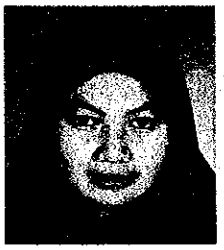
2. Impressions by the Participants

■ Asia

■ Brunei

The Everlasting Memories in Japan

Dyg Raedah Bte Haji Masri
Social Development Group



On the 13th September, 1995 we arrived at Narita Airport around 6:22 a.m. The group consists of fourteen members including four students. On the first day, our accommodation was at the Hotel Metropolitan in Tokyo. There were about seven hotels that we were supposed to stay from time to time, accordingly.

Japan, in our expectation, is a very industrialized and productive country as well as the people despite being very friendly, helpful and honest. Along our staying in Japan, the activities that were scheduled for us was mostly visiting interesting and beautiful places such as Hiroshima Peace Memorial Museum, Imperial Palace and so on. Hearing lectures and having question and answer session was also held. Nevertheless, with the Japanese counterparts we had the chance to go for social activities, for example, sports, shopping and having group discussion with them. However, most of us were quite happy when the presentation was mostly done by the Brunei people. How about the Japanese counterparts ... ?

Homestay with the foster family in Okayama was the best of all, to most of us. That is, from the information obtained, we were the first group of Bruneian to come to Okayama and stay in that prefecture. Initially, Okayama prefecture was very strict with the outsiders. We had the opportunities to meet with the Deputy Governor of the prefecture. We even had the chance to take a picture with him.

During the homestay, we tried to use as many Japanese language as possible. The hospitality that we perceived would still remain in our heart and soul. Consequently, at the farewell party, most of us cried and we found that the time staying with was not long enough.

Shizutani school and Yamato elementary school were another place we visited. In Shizutani school, we were the first group to be allowed to enter and "clean" the class. Before that, we were taught the proper manner to enter the class. Then, before leaving the class, we were to wipe the floor of the class. What an experience!

Finally, we as a whole group did enjoy ourselves in Japan and the prefectures we had

been. Even though, we say "sayonara" but the memories we had will still remain and when recall back the memories, it seems like it happened yesterday. For you Japan, *iroiro arigatogozaimashita* and for JICA thank you for organizing the programme.

My Stay in Japan

Khairul Salleh Haji Abd Rahman
ASEAN Comp.
Press Group

I was impressed by the Japanese society who underwent drastic changes from agriculture based economy to manufacturing and to tertiary services industries.

This transition took place through stages of modernization leading to dramatic changes in its economic and social development.

This programme has deepened my understanding on various aspects of Japanese culture which include;

a. home life such as marriages, education and women at work
b. traditional dramas and entertainments : Japanese dancing "Awa Odori Dance"
c. traditional arts and crafts : pottery making (pasu) and weaving
d. religion : buddhism, Christianity and Sinto (visiting several temples)
e. Japanese foods and drinks

I was impressed with the role played by the mass media in rebuilding Japan as a democratic and peace-loving nation.

I am also fascinated by Japan's new gateway to the world, i.e., Kansai Airport, being the world's first airport built on reclaimed land.

I am sympathetic and sorry regarding the Great Earthquake which hit Kobe City in the early dawn of January this year which claimed more than 4 thousand lives. I would also like to express my deep condolences for those who lost their homes and jobs as well as for those who lost their loved ones in this recent earthquake.

I am also impressed on the Kobe City Government in making its own intense efforts to get the citizens daily lives back to normal and to restore the function of the city as quickly as possible.

During my visit to Hiroshima Peace Memorial Park, the way they exhibited the impacts of atomic bomb heighten our awareness on the importance of abolishing nuclear weapons and realizing lasting world peace, the earnest wish of Hiroshima.

The host focuses upon the human element in introducing Japan which promoted better understanding and gave a positive impact on me during my brief stay on this Youth Invitation Progamme.

■ Asia

■ Indonesia

To Japan, the Land of the Rising Sun: Everything in Memory

Hasnini Hasra
Education Group

Being in Japan — it was a sensation that was unrealistic to me, all the more because I was not here for sightseeing but as representative of my country in the Youth Invitation Programme. Without much thinking, I found myself suddenly in the world—renown metropolis of Tokyo. What a strange turn of events. I walked through various places with friends in my group, and many happenings brought positive results.

When I saw advanced technology blend and harmonize with elements of its unique traditions, I felt as if I was looking at a multifaceted picture. In Japan, many ceremonies continued to be rooted even in the smallest parts of society. When I saw Japanese participants demonstrate tea ceremony at the In-house Seminar, I even felt respectful for such traditions. Social life in Japan continues to move to the rhythm of tradition to this day, and this rhythm was still flowing among the young people who reportedly prefer the Western style. The In-house Seminar was very meaningful in that we were able to exchange a lot of information.

In the area of education, I was made to realize Japan's presence as an advanced nation again. After the tour of a number of schools, I came to the conclusion that Japan stands at an overwhelming level of attainment not only in economic and industrial strength but in education as well. My surprise at a visit of a kindergarten was huge. I saw the toddlers who were aged 3 and younger, and it was wonderful to find that the process of social development start at such an early age.

Gradually, I began to enjoy observing the environment around me and at the same time to have complex feelings about it. One example was my homestay in Yamagata. The people of Yamagata, including my host family, associated with me in friendship and with genuine feeling. It is my honest remark and is no exaggerated praise. Thanks to them, I even forgot being homesick.

There were many things that cannot be expressed in words. Visits to places of cultural and artistic stature had been deeply impressive. The nature of Yamagata — its mountains, rivers, and valleys — enhanced my feeling of praise and said goodbye to me as I left Yamagata for Osaka.

When would I be able to see all of this again? The things that have been imprinted in my brain are mere memory and only makes me want more to confirm them again with my own eyes. It was very sad to say goodbye. I would like to come again, though I cannot tell when it will be. Still, everything has been unforgettable and invaluable experience. This will probably not change after returning to my home country.

JAPAN IS MEMORY.

Programme Report

Soni Drestiana
Social Development Group

I was very fortunate to have participated in the Youth Invitation Programme. There are people who visit Japan, but not all of them are able to visit places like those in the programme, which are not part of a normal tourist itinerary.

I viewed the programme from two standpoints, namely, programme planning and preparation and accomplishment of goal. Planning and preparation were executed extremely professionally. There was little mistake in time allocation and calculation or in reference materials. In an indirect way, programme participants learned to be orderly and organized. This discipline is a meaningful and rewarding "souvenir" for us Indonesians.

In terms of goal accomplishment, I felt dubious at times. What would I be able to do with what I gained here after my return? However, I believe my friends, particularly those involved in social work, gained tremendously from this programme. My friends who are involved in social issues appear to have learned much from this programme, particularly in technical matters.

What I gained for my background from this programme is that I was able to understand Japanese society better. I was able to see Japanese society in person.

Through the entire programme, I felt that the programme can be tremendously beneficial for participants who share the same background as the goals and theme of the programme. If this is ignored, the programme will simply be for an Indonesian a sightseeing tour of Japan.

Impressions on Japan

Lusiana Karim
Economy A Group

I would like to thank God for being given the opportunity to participate in this JICA programme, since I was able to travel through Japan for one month. In the meantime, I was able to meet the Japanese in person and experience Japan's culture and advanced technology as an industrialized nation.

My first impression of Japan was the Japanese people's sense of discipline toward keeping time and in work. People regard time with great importance and are accustomed to planning schedules and handling matters according to schedule. Incentive to work is high, and people are very enthusiastic about their jobs. Once they find something they want to do, they concentrate their efforts with intensity and professionalism.

On the other hand, the traditional culture is not lost but thrives in everyday living despite Japan being advanced in technology and development. I felt this particularly during my homestay and found the people friendly and homely.

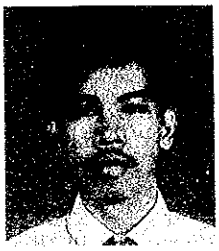
Because development is implemented comprehensively through collaboration among

various government offices, each facility is without exception being built in connection with others. I was impressed that city planning is being executed that way. Cities have extensive social infrastructure regardless of size. There is little difference between cities and rural areas. All Japanese are benefiting from development.

What I saw and felt during my stay in Japan has become unforgettable memory. There had been many meaningful experiences, which, I believe, will become useful in my future.

The Image of the Japanese Family

Nida Tarnidha
Economy B Group



The Japanese are well known for being organized and enthusiastic for work. The country not only recovered from postwar devastation in less than 50 years but caught up and even surpassed other advanced nations. Their zeal for work is tremendous. It is quite ordinary in this country that the large majority of office workers work late into the night and even talk about work at pubs.

What then does the Japanese home look like? I had the opportunity to stay in Japan for one month on invitation of the Japanese government. In participating in the programme, I wanted to know most of all Japanese family life, in which the breadwinner of the family spends more time at the office than at home. The roles of the father and the mother are clearly divided in Japan. In other words, the father is in charge of providing financial support, and the mother of pouring energy into care and education of the children. The family is able to meet each other only during breakfast before going to work or leaving for school. Because of intense competition at work and economic reasons, the father is absent in quite a few families. Contact between the father and children is lost. It is said that the children gradually come to regard the father more as a stranger as they grow.

After hearing this, I was to go on homestay in a town some 60 kilometers away from Tokyo. The three-day stay was a good opportunity to see the Japanese home in person. Because my stay fell on a weekend, "Oto-san", the father who usually is away at work was home, and the family had a half-day outing to a place outside the city. At night, the family had an enjoyable dinner and talked about what happened during the day.

Because his commitment to work to support the family, the father has little time to spend with the children and tries to spend time with them during holidays. The children seem to look forward to such holidays. The family spending weekends together appears to be very important in maintaining relations between the father and the children.

Such was my impression of the Japanese family from what I learned during the In-house Seminar and the homestay. We were able to come in contact with each other's culture through the programme. Learning about other cultures may also mean learning about one's own culture at the same time.

Homestay

Kamelia Indriasari
Agriculture Group

In the Youth Invitation Programme, I had countless interesting experiences. Although my Japanese was limited to the essential minimum, I was able to somehow communicate with the Japanese.

The location of my homestay was a small town called Hiyoshi-cho, located roughly one hour by car from Kagoshima City.

The host family was a farming family cultivating tobacco. The husband and wife use machinery to run the farm. They had two boys and one girl, who all go to school.

When we two arrived at the home, the entire family came to welcome us. Mixing words with gestures, we talked a lot about our families, ourselves, culture and customs, education, and many other things. The children were able to understand a little English.

Communication gradually began to go smoothly. However, an incident that became unforgettable happened. It all started from a communication problem when we asked them where their grandparents are. We wanted very badly to talk to them and take pictures with them. The next day after the children left for school, we went out with friends of the host family. We imagined that they are planning to take us to the grandparents. When we asked where they are, we were told that they are "sleeping." We understood them to be sleeping at a house and followed them with high expectations. However, the destination was a graveyard! We were scared but hesitatingly paid visit to the grave, talked to the "sleeping" grandparents, and took pictures together!

My Surprise in Japan

Rahmi Qadri
ASEAN Comp.
Education 1 Group

I was given a chance by JICA to come to Japan on the Youth Invitation Programme. I arrived in Japan on Oct. 25th, 1995. I stayed in Japan for 30 days. After several days of my stay in Japan I was filled with some surprise. I was amazed by the invention, new information, experience and creative ideas. This is my first trip abroad. I am very happy to be on this programme because I get a better insight of Japan, and I can meet with other members from other ASEAN countries, Singapore, Malaysia, Thailand, Brunei and Philippines.

Firstly, I gained some useful knowledge in Japan. Japan has good infrastructure with a wide use of computers. I observed that Japanese work hard and have good attitude. They also display a great sense of groupism.

Secondly, there are some valuable experiences which I get from my stay in Japan. I gained more insight about Japanese culture and history. I learned about the education system and problems of the different ASEAN countries and how to solve them. I also got to see the methods and techniques of teaching in Japan and share with them the problems faced by the Japanese.

Last but not least, I gained some creative ideas for my country. I will try to pass this information on to my government, my society and my students and I can even share my experience and knowledge gained in my country's media.

In summary, I think this is a good programme. I can study about Japan in a practical way. I give my full suport for it. If possible, I would like to see this programme be extended to 2 to 3 month to gain even richer experience and in depth knowledge about the Japanese society and culture.

Special thanks for my friend "Susie"

■ Asia

■ Malaysia

My Opinion on Personal Traits of the Japanese

Woon Bee Loah
Economic and Financial Management Group

I believe that the Japanese have a distinctive identity and are characterized by objectivity and productivity. I felt everything is performed smoothly and without error. Japanese society consistently provides the best to others. One example is the meals served. The meals not only provide balanced nutrition but are decorated with beauty and variety of colors to stimulate the appetite. Beauty in decoration appears to show that the Japanese are seeking relief and relaxation from their hectic work schedule.

Next, the congenial hospitality and friendly smiles of the people receiving visitors are so warm that they even make people forget their worries, if they have any. The hospitality is probably nowhere else to be found, regardless of how much effort is made.

In the lectures, I could feel surprisingly well the enthusiasm of the lecturers in trying to convey to us Malaysians information and knowledge they had to offer, in spite of our lack of understanding for the Japanese language. The Japanese participants and coordinators showed great determination throughout the programme to make accomplishments. Under any conditions, they were without

exception patient and filled with the willingness to help.

All products were made with extreme care and skill and were made to perform well, too. What can be called fine art may be the fruit of Japanese zeal for work and of problems in manufacturing that they had faced and addressed in the past.

Regardless of occupation, the Japanese are extremely faithful to their job. The same is true for people who withstand torrential rain and cold and stand erect in front of nightclubs carrying signboards soliciting customers to their clubs.

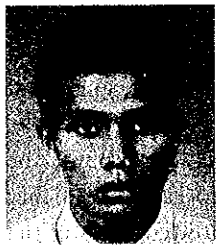
Although Japanese society in general appears complete in the material sense, there are areas where there are inadequacies. It appeared that Japanese enthusiasm in everyday living is focused overly on living alone. I think it may be better if they have ten minutes every day to think whether the conditions today are providing them the greatest satisfaction.

The success of a product lies in whether it satisfies the design goals of the maker. In the case of a refrigerator, success is achieved by fulfilling the maker's goal of cooling foodstuffs. In this way, the success of a person's life is determined by whether or not his goal is achieved. Though man may be regarded the most perfect creation in this world, human wisdom is not able to foresee all events of the future. This was proven in the earthquake in Kobe, in which all human knowledge and technology did not have the ability to avert.

From such various standpoints, we can say that man has many weaknesses. By accepting the weaknesses, we will see that we are able to live meaningful and wonderful lives and to face all problems with hope.

We Must Learn from their Enthusiasm and Drive

Muzafar B Abdul Mutalib
Small and Medium Industry and Manufacturing Group



There is a Malaysian saying that goes like this: "A trip to faraway destination increases knowledge." By trip, I mean the month-long stay in Japan here, and knowledge means whatever I gained from visits and observations I made during the period. In the stay, I was able to see that the Japanese have very special attitude and attention toward matters. This attitude is part of the Japanese lifestyle.

The behavior and attitude toward work seen in every Japanese is founded on early formation of self-discipline. At Tokyo Disneyland, for example, visitors line up without any explicit order to take pictures, I also learned that the customer is placed first in service businesses. Store employees receive customers warmly even when they are only browsing through. Customers are also attracted by various designs. An example is the various patterns and shapes of fans designed to suit customer needs. The Japanese intelligence to apply a technology — vending machines in this case — in real life under various conditions is an essential part of Japanese life. Many of those vending machines which can be regarded as "intelligent" can be seen selling cigarettes, railway tickets, prepaid telephone cards, etc., as well as exchanging money at bowling alleys and other recreational facilities.

We were very much attracted by the orderli-

ness of people using public facilities. I felt pedestrians being paid respect when crossing the street from the fact that car drivers stop and allow pedestrians to cross first.

We were also surprised to see the Japanese regard time as valuable. I also felt that the Japanese should be proud of themselves for having such a wonderful attitude toward time. We felt it most in the trains. The trains are operated consistently on schedule, and have become an important transit system.

To sum up, Japan became an industrialized nation because of the enthusiasm and drive that the Japanese have. What I have cited here are small examples. However, the Japanese do not hesitate to do their best even for such small matters - let alone major issues such as technology. That is what we saw in Japan.

Japan's Development and the Product of Growth

Ahmad Nadzri Bin Saad
Agriculture Development Group

It is evident that Japan today plays a central role in economic growth. This can be seen in the projects under way in Japan and the growth achieved in the efforts. The distinctive characteristic is diligence at work, discipline, strong sense of responsibility, loyalty to the organization, meticulousness, and accuracy in work that can be seen in all working people. I was surprised that time management is executed precisely by each person, the society, and organizations. This is very important because this is closely related to various activities. The Japanese transit system, for example, is perfect in every aspect including its accurate and smooth operation. The system prevent congestion and minimize risks of accidents and pollution. The precision and smoothness effectively works in carrying out other activities.

The Japanese are chiefly a single race and speak one language. This has helped facilitate growth of awareness as one nation. Unlike multiethnic nations like Malaysia that must integrate all ethnic groups into one language and one culture, Japan was able to concentrate on the issues of "nation building."

The issue is a major theme, and all administrative policies are expected to be controlled by the national leadership and executed by the citizens. The difference between Japan and Malaysia is that Japan had the edge in the path toward industrial development. However, rapid development brought negative effects on private individuals, families, society, and the nation. This is reality involved in all developing nations. But the negative effects must naturally be minimized. One negative aspect, for example, is the decline of morale among youths and lack of respect to elders and tradition. Though there may be general recognition of these problems, however the perception and evaluation are not founded on clear data. Basically, all government policies must be planned to prevent negative effects from occurring in the nation's development stage.

The drive to focus on work for national development led to reduction of exchange with the family and affected family relations.With less time to be with family, it becomes very difficult to maintain harmony in the family. It can be said that such the negative effects touch the family, society, and nation adversely.

Rapid development raised economic standards and at the same time diminished regard